

42258

教科書文庫

4
810
42-1928
2000 301 849

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

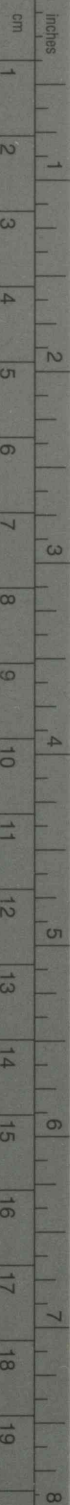


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
T011
資料室

新制
女子國語讀本
第二修正版
卷八



文部省檢定
高等女子學校國語科用
昭和三年一月二十四日

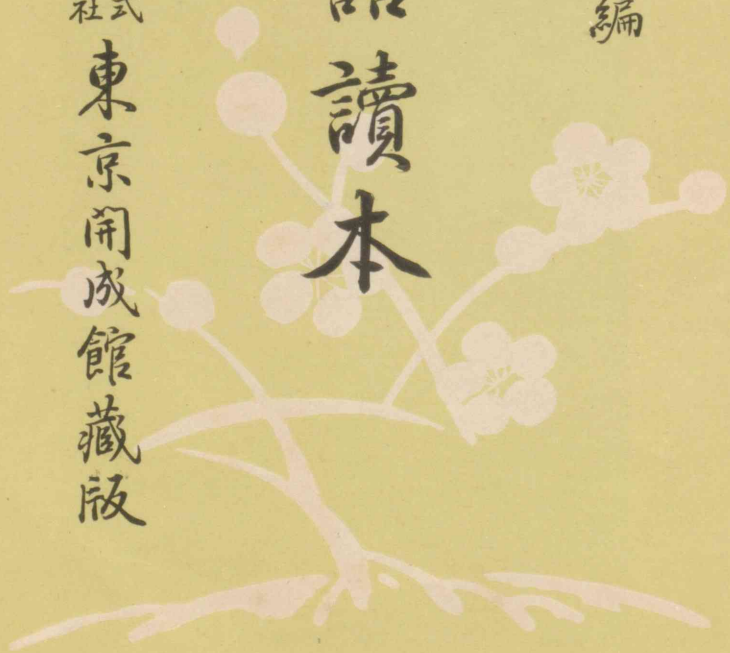
資料室

375.9
To 11

東京開成館編輯所編

新制
女子國語讀本

株式會社
東京開成館藏版





慈母觀音 (狩野芳崖筆)

廣島大學圖書印



新制女子國語讀本

第二修正版

卷八

目次

- 一 若き日本の使命(詩)……………中村孝也……………一
- 二 修道院へ……………南部修太郎……………五
- 三 長谷寺まうで……………幸田露伴……………三
- 四 現代歌人の和歌(和歌)…………………………六
- 五 維新の名花(自修文)……………額田六福……………三
- 六 日本の女性(詩)……………土井晚翠……………三
- 七 母たるべき爲に……………三宅やす子……………四

目次

八 息女への教訓(候文)……………鳥丸光廣…一〇

九 男女の分業(自修文)……………野上俊夫…一〇

一〇 病院……………大町桂月…一五

二 今様五題(今様)……………六

三 新島守……………(増鏡)…六

三 名門の最後……………高山樗牛…七

四 高山樗牛氏を懐ふ(自修文)……………近松秋江…八

五 古調新調(俳句)……………空

六 玉勝間抄……………本居宣長…九

七 冬(詩)……………川路せい子…一〇

八 落花の雪……………(太平記)…一〇

一九 隅田川(謡曲)……………一〇

二〇 戦地の一戸將軍へ(候文)……………大島貞子…一〇

二 新古今集の歌(和歌)……………一三

三 錦祥女(淨瑠璃)……………近松門左衛門…一六

三 教化上から見た近松(自修文)……………藤村作…一四

四 徒然草抄……………吉田兼好…一四

五 女をよめる歌(和歌)……………一五

六 藝術と家庭生活……………池田鏝子…一五

七 御歌を拜誦して昭憲皇太后を偲び奉る……………三

八 多摩御陵参拜の記……………三室戸敬光…一五

九 條武子…一七

Faint table of contents text, including chapter titles and page numbers, mostly illegible due to fading.

新女子國語讀本

第二修正版

卷八

一 若き日本の使命

歴史は長し。されど國は永へに若やかなり。

仰ぎ見る神武の大帝

建國創業より茲に二千五百八十有八年。

人は去り、世は移ろひ、

世紀はいくたびか旋り行きつ、

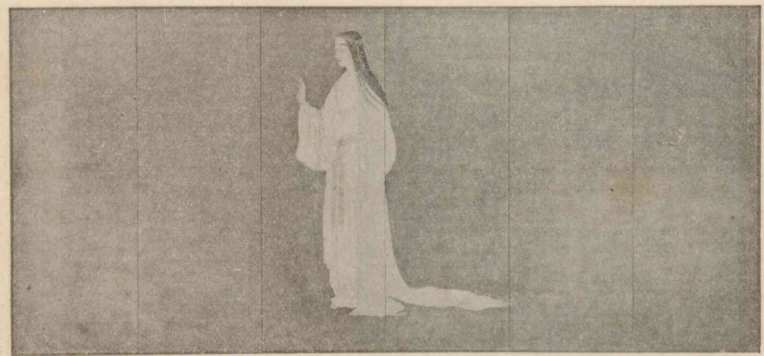
寄せては返す榮枯の浪に洗はれて、



中村孝也

中村孝也 群馬縣の人、明治十八年生、文學博士、東京帝國大學史料編纂官、同大學助教。○本課に挿入してある繪は尾竹竹坡筆の「天孫降臨」である。二千五百八十八年 昭和三年。

群り起れる英雄の追憶、
 夢の如く淡く消え行けども、
 潑刺たる日本民族の大精神は、
 時を重ねてますますその光彩を發揮す。
 見よ、悠久無限のあなたに、
 燦として輝く神祖の御姿、
 聴け、朗々たる無韻の大御言葉、
 大宇宙の靈氣を浪だたせて來るを。
 豊葦原の千五百秋の瑞穂國は、
 わが子孫の君たるべき國なり。
 爾、皇孫就きて治らせ。 幸くませ。
 天つ日嗣の榮えまさんことは
 天壤のむた窮まりなかるべし。



壯なるかな、天軍一齊に歡呼の聲を擧げ
 て、
 廣大無邊なる神徳を讚美す。
 いかにか偉大なる宣言よ、
 いかにか雄渾なる斷定よ。
 天日の遍く照らし給ふところ、
 自由と愛と光明と希望と、
 生々發達の悦び全世界に漲る。
 その高尚なる道徳性に照らされて、
 わが民族の使命は夙に指示せられき。
 起てよ、全人類進歩の先頭にあつて、
 平和の使者たること、即ち是れ
 我等の存在を聖ならしむるものにあら



すして何ぞや。

汪洋たる東洋文化の潮流と、
澎湃たる西洋文化の潮流とは、

今や相寄り相融合して、

渾然たる世界文化の大潮流をなしつつ、

あり。

この新たなる生活を指導するものは果
して誰。

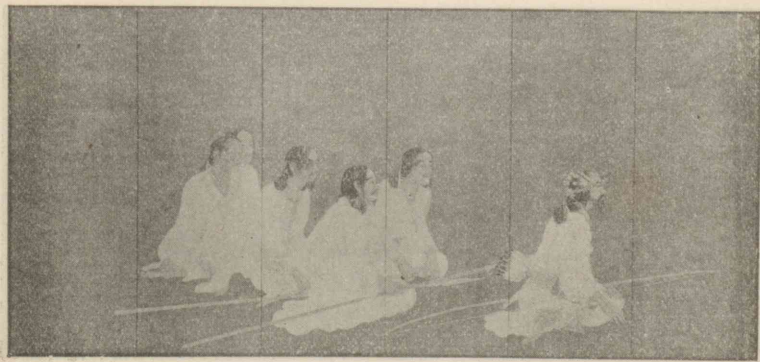
東海國あり。永への青年。名は日本！

建國以來二千五百八十八年の歴史を有

して、

連綿たる皇統を戴ける國民の若々しき。

新時代の喇叭を高らかに吹奏しつつ、



平和と愛と悦びとの花瓣を撒き散らすところ、
神勅は運く。

二 修道院へ

船は靜かに函館の舊棧橋を離れた。

港の上にはまだ冷々とした朝靄が罩め渡つて、雨上りの秋空は憂

はしげに暗んでゐた。騒がしい揚錨機ウイシヤの音、出帆の合圖の笛の響

などが、その重く沈んだ朝の空氣を顫ミチルはせながら聞える。蒼黒く

濁つた海は、はかない空の明るみを波の背に映しながら、絶えず往

き來する小蒸氣の蹴波に揺いで居る。時々白い鷗の群が水を滑

るやうに低く飛んで、身を翻しては船の蔭に隠れ、そして、いつの間

にか雪を散らしたやうな點になつて、遠くの波の間にふうはりと

浮ぶ。荷役に忙しい樺太または釧路通ひの汽船や、白いペンキの

修道院

北海道波島國

上磯郡當別に

あるトラビ

ストの僧院、

明治二十九年

開創。

南部修太郎

仙臺市の人、

明治二十五年

生、文學者。

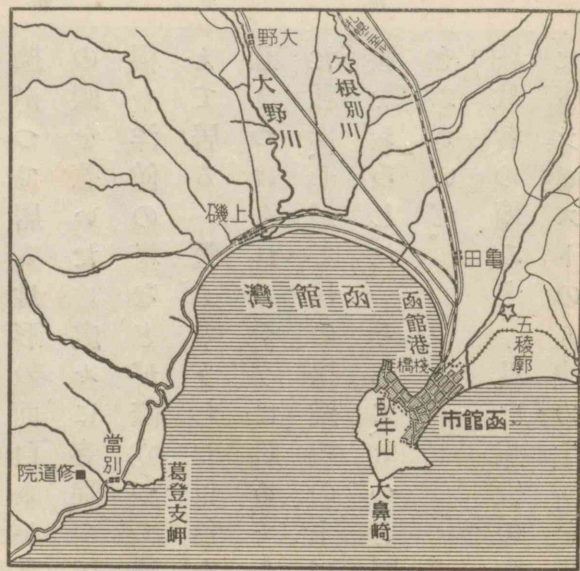
醜く剥げた帆船の中には、舷の低い捕鯨船の疲れたやうな姿も横たはつて居る。私の船はその間を緩やかに進んで行つた。眼に映ずる凡べては、秋の音づれの速かな北國の寂しい朝の姿であつた。港を包んで居る遠近の山の頂には、冷たい色の雲が流れて、その暗い陰影に劃られた山々の巖には、憂鬱と冷酷の色が深く刻まれてゐた。北國の旅人はその自然に對して、何等の親みをも濫かみをも感



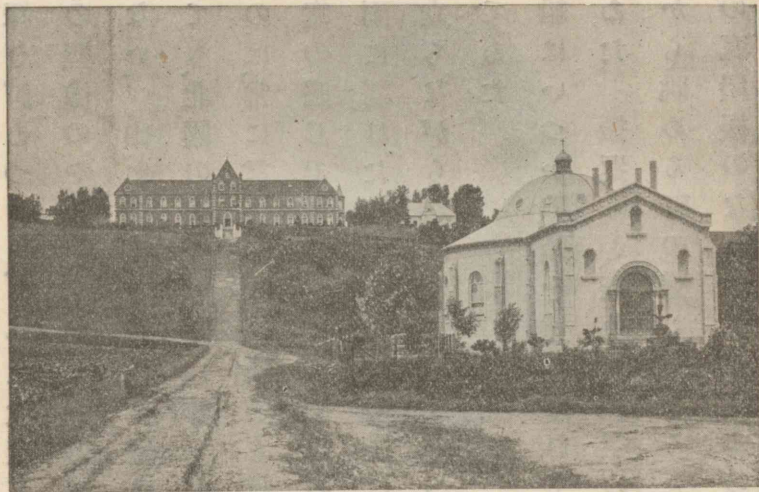
郎太修部南

ずることが出来ない。時には世に背く孤高の聖者のやうに、時には荒み果てた心冷やかな癡人のやうに、北國の自然は常に彼と離れて立つて居る。彼は孤獨を感じる。そして、自然と人の間に近づきがたいやうな壁のあることを意識する。美しさがあつても、

輝きがあつても、それは大理石の塑像のやうに、血がない、熱がない。山を仰いでも、海を眺めても、北國の旅人の心に薄るものは、常に言ひ知れぬ空虚と寂寞の感じである。私は前夜の雨に濡れた船首の甲板の上に立ちながら、そんなことを考へてゐた。



船はいつか埠頭を遠く離れてゐた。振返ると、灰色の秋空の下に函館の町が一目に見える。海から眺める町の感じは、どことなく異國的で、あの古めかしい鉛色の瓦屋根のないことが、日本の町らしい親みを薄くする。しかし、



修道院

右手の臥牛山の中腹から、やゝ急な傾斜を作つて入り亂れて居る家々が、流れるやうに平地の方へ擴がつて居る地形の面白さが私の眼を惹いた。處々に寺院の屋根や洋館の塔などが際立つて聳えて居る。暫くさうした景色を惹きつけられるやうに眺めてゐた私は、やがて傍の揚錨機の上に腰をおろした。そして、ぢつと眼をふさいだ。

殉教者の悩み！ 私は想像の中に*
Trappist
トラピストの人達の生活を描

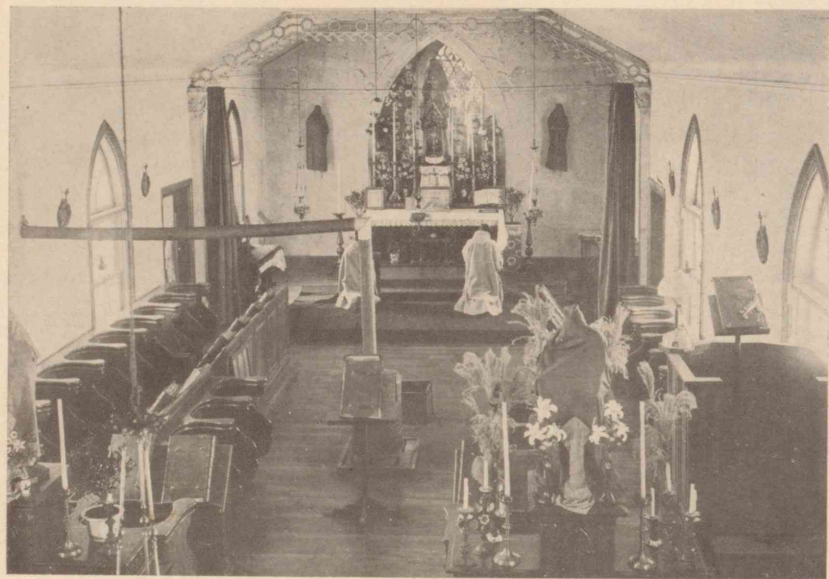
トラピスト
西曆一四一〇
年佛國に起つ
たキリスト教
に屬するト
ラップ教派。

いて見た。そして、それは私が彼等に對して全く見知らぬ人であるといふ點から、今そこに近づかうとして居る私の心持を、色々な意味に於て不安にさせた。同時に、何か不思議なものに觸れるといつたやうな好奇の念も湧かすにはゐなかつた。いづれにしても、彼等は或特殊な世界に或特殊な生活を營んで居る人達である。厳格な戒律の下に、一身を祈禱と沈黙と労働に捧げて、あらゆる衆



修道院天使園に於ける修道女の草取り

愚と凡俗の世を離れた静かな修道院の中に、己の一生を過すといふこと、それは少くとも一つの奇蹟ともいふべき生活である。「それが果して人間として本當の生活なのだらうか。」と、私は密かに疑つた。「神のために、たゞひたすら神のために……」と、私は心の中で繰返した。「若しそれが本當の生活であるならば、少くとも私も考へて見なければならぬのだ。」と、私はまた思つた。彼等は人から離れて居る、あらゆる人間的の世界から隠遁して居る、歡樂を知らない、美食を思はない、絶対に欲望を斥けて居る。そればかりでなく、神に對して祈る聲は持つてゐても、人に對しては聲を鎖して居る。「人は靈だけに生きる。」これを彼等は固い信條として、あらゆる手段で己の肉體を虐げて居る。「それほど人間の肉體は醜いものだらうか、それほど呵責せねばならないものだらうか。それならば、なぜ彼等は自殺しないのだらうか。」



修道士の祈禱

うか。」それは次に起つた疑であつた。

しかし、行爲の上からいへば、彼等の生活は眞に徹底した生活のやうに思はれる。そこに主義と實行の完全な一致がある。その飽くまでも靈の世界の永遠を信ずるの強きに於て、また絶間のない祈禱と冥想によつて精神生活を充實させ、怠のない労働によつて肉體を鞭打ちながら、妄執と欲望と邪念から解脱しようとする努力に於て、私は尊ぶべきものであると思ふことが出来る。

「そして、自分は……」と、私は自ら省みた。私は自分の心の不安と生活の動搖を思はないでは居られなかつた。そこには自分に背き人を裏切るあらゆる虚偽があつた。淺ましい野心と嫉妬と猜疑があつた。またそこには病み疲れた不健康

南部修太郎自署

な醜い欲望に穢された肉體があつた。そして、彼等と自

南部修太郎

分とを隔てて居る或物を考へた時、私は息づまるやうな氣がした。今自分の前に展げようとして居る一つの世界、それは或恐怖に似た感情を私の胸に喚び起した。私は思はず我に返つた。當別の岬が漸くはつきりと行手に見え出した。(修道院の秋)

三 長谷寺まうで

幸田露伴

弓張月のやうく、光りて、入相の鐘の音も収まる頃、西行は長谷寺に着きけるが、訪ひ驚かすべき法の友のなきにはあらねど、訪ひも寄らで、観音堂にまゐり上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々をなぶりて夜の嵐の誘へば、はらくと散る紅葉なんどの空に狂ひて吹き入れられつ、法衣の袖にかゝるもあはれに、また佛前の御燈明の瞬きしつゝ、萬般のもの、の黒み渡れるが中に、いと幽かなる光を

幸田露伴 名は成行、東京市の人、慶應三年生、文學博士。
西行 俗名は佐藤義清、鎌倉時代の歌僧、建久元年(八五〇)歿、年七十三。
長谷寺 大和國磯城郡初瀬にある。眞言宗豊山派總本山。

第二十五 法華經第二十品は觀音經である。

放つも趣あり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、何となく平時よりは心も締りて、身に浸み渡る思のすれば、なほ誠を籠めて誦し行くに、天も靜けく、地も靜けく、人も全く靜まりたる、時といひ處といひ相應じて、我が耳に入るは我が聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神などの聲を和して共に誦するかと疑はるゝまで、上なく殊勝に聞え渡りぬ。特にまゐりたる甲斐はありけり。菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作をば善しとして、必ず納受し給ふなるべし。今宵の心の澄みきりたるこの清しさを何に比べん。あまりに有難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら、この御堂の片隅になり、跏坐して、曉方になほ一度讀誦しまゐらせて、さてその後、香華をも供して罷らんと、西行やがて三拜して御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水か枯れし木かの、動きもせねば音も立てず、寂然として坐しゐたり。

夜は沈々と漸く更けて、風も睡れる如くなりぬ。右左に並びて立ちける御燈明は、一つ消えまた一つ消えぬ。今はたゞいと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢の如くに残れるのみ。この寺の僧どもは寒氣に怯ぢて、所化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに終に見するものなし。いふべき方もなく靜かなれば、日比焼きたる餘氣なるべし、今薫ゆるとにはあらぬ香の有るか無きかにおのづから匂を流すもいとよく知らる。

四番左持 雨野草

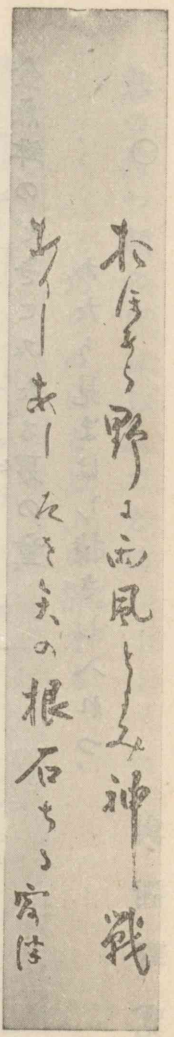
春さめのふり
そめしよりの
べ見ればふか
みどりにもな
りにけるかな
右
しめんとい
ろますあめの
ふりそへばふ
かみどりなる
のべの草かな

西行法師筆蹟

四番左持
雨野草
春さめのふり
そめしよりの
べ見ればふか
みどりにもな
りにけるかな
右
しめんとい
ろますあめの
ふりそへばふ
かみどりなる
のべの草かな

かゝるをりから、何者にか此方を指して來る足音す。御佛に仕ふるこの寺のものの燈燭をつぎまゐらせんとて來つるにやと打見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を寒さに堪へてや、頭には何やら打被きたれど、正しく僧の形したるが歩み寄るさまなり。心を止むとはあらざれど、何ともしもなくなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方へ身を入れたれば、定かには知れぬながら、この御堂に打向ひて、一たびはまづ拜みまつり、さてしづくくと上り來りぬ。御堂は狭からぬに、燈は螢ほどなり。燈の高さは高し、互の程は隔たりたり。此方を彼方は有りとも知らず、彼方を此方はよくも見得ねば、西行はたゞ我と同じき心の人もまた有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。彼方はもとより闇の中に人あることを知らざれば、何に心をおくべくもなく、御佛の前に進み出でつ。いとつゝましげにかしこまりて、數

多たび合掌禮拜し、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり。その心操の淺まならぬは、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨へ得ざれば、面はまして見るべくはなけれど、淨土の同行の人なるものを、呼びかけて語らばや、名をも問はばやと、西行は胸に思ひけるが、率爾に物いはんは悪しかるべし。祈願の終つて後にこそと心をひかへて窺ふに、彼方は數珠を取出し、さや／＼とばかり擦り初めたり。針の落つる音も聞くべきまで物靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、水精の數珠を擦る音の亮かなる響いと冴えて神々し。御經は心に誦すとおほしく、萬籟絶えたるに、珠の音のみをたゞ緩やかに響かす。その聲或は明かに、或は幽かに、或は高く、或は低く、寢覺の枕の半ばは夢に霰の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に菡萏の急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友ずれか、山吹匂ふ山川の蛙鳴くか



蹟筆伴露田幸

おほき野の風とや神に戦ふ。雨ありしよみ野にちたを矢の露根あし神

と過たれて、一聲聲中に萬法あり、皆與實相不相違背と、いとをかしくも聞きなされるれば、西行感に入つてありけるが、期したるほどのことは仕果てしにや、その人數珠を收めて、御佛をば禮拜すること數多たびしつやをら身を起して退らんとす。菩提の善友、淨土の同行、契をこの上に結ばんには、今こそ言葉をかくべけれど、思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みて、歌の調は好かれ悪しかれ、西行俄に詠みかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、何と仰せられしぞ、今一たび。

と、心を押鎮めて問ひ返す。聞きとりかねけんと思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みて。」と復び言へば、後は言はず、君にておはせしよ、こはいかに。」と涙にふるふおろく、聲、言葉の文もしどろもどろに、身を投げ伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたもなきその昔の我が妻にぞありける。(二日物語)

四 現代歌人の和歌

○

澄みきたり輝く空となりにけり、

窪田空穂

白菊の花地に咲きいづる。

金魚鉢のどきこみたる男の童、

あたり見まはし指さし入れつ。

○

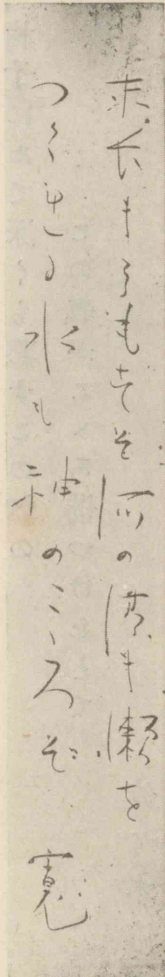
與謝野寛

與謝野寛
舊號は鐵幹、
京都市の人、
明治六年生。

窪田空穂
名は通治、
野縣の人、
治十年生。明長

春の持つ顔の片はし枝ごと

光らぬはなし山の雜木も。



蹟筆寛野謝與

悲みを直ちにいへる歌よりは、

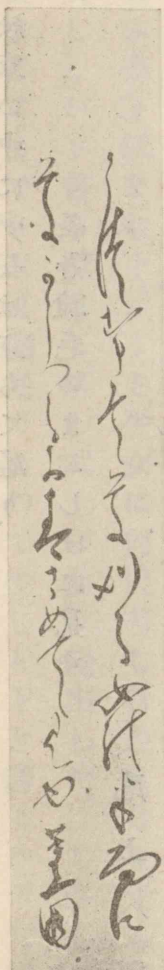
花一つある露草ぞよき。

○

金子薫園

馬が来れば小さき諸手ひろげつ、

走り行く子に春はながる。



蹟筆園薫子金

うつつむきて草
刈る女の半面
かに草がうつる
ゆ 青草がうつる
薫園 見

金子薫園
名は雄太郎、
東京市の人、
明治十年生。

木長きみもす
そ河の清き瀬
をつくれさる
ぞも神のこる水
寛

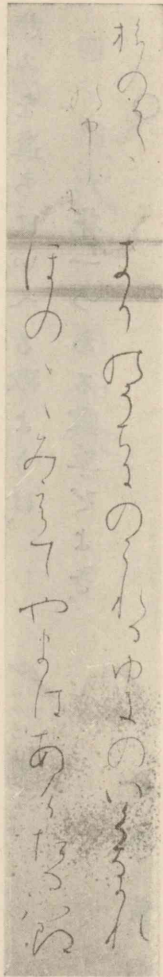
秋草の中に少女は立ちて居り、

長き睫毛のまぶしげに見ゆ。

尾上八郎

散らばれる書を見るさへいとわびし、

亂れしこゝろ見るがごとくに。



蹟筆郎八上尾

椅子にゐて深くも黙すこの朝の

この我がこゝろ傷つけじとて。

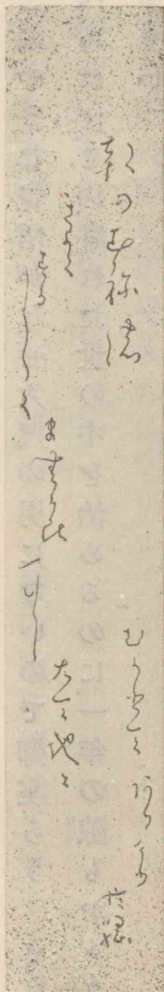
佐々木信綱

たゞ一人たゞ一人ぞと思ふ時、

春の青の弱きなみだはこぼれずなりぬ。

あめつちの如何なるものか少女子の

若きいのちにあへてまさらん。



蹟筆綱信木々佐

自修文

五 維新の名花

額田六福

我もまた同じ御國に生れ来て、

大和心のあらざらめやは。

有合ふ筆と紙を取上げると、少女は何の苦しむ色もなく、すらくと美しくかう書き流して、客の武士の前に差出した。しかし、その態度はどこまでも天真爛漫であつて、少しも才を誇るやうな様子

尾上八郎

山號は榮舟、
治九郎、
文士、
博士、
子高等、
校教授、
師東、
範京、
學女、
學國、
明岡

旅のうたの
中にうけ
のこのう
のいなる
ほのくみ
たはあけ

佐々木信綱

三重縣の
明治五年、
文士、
博士、
師東、
京國、
學女、
學國、
明岡

朝のむねの
よくすか
しむかひ
けりかひ
と信綱

額田六福
岡山縣の
明治二十三年、
生、
文士、
學者、

歌は國學者の大隈言道（ことみち）に學んで、すぐれて堪能（かん）であつた。處女の鑒として、一番の若侍達の懇望の的であつたが、二十四歳の年に、同藩の野村新三郎貞貫の人物を見込んで、自ら父に乞うてその妻になつた。

新三郎貞貫は勤王の志の厚い士であつた。國學に秀でた彼女も、自然京都を尊ぶ志が深かつた。しかし、當時福岡藩は幕府方の勢が盛であつたので、貞貫は早く覺悟をして、四十一歳で隱居して、城下から一里ほど離れた平尾村の山間に小さな庵を建て、そこに浮世の塵を避けて、ひたすら和歌の道を樂しんでゐた。その中に良人は歸らぬ旅へ立つて行つた。彼女はすぐに髪を切つて尼になつたが、その頃から勤王の志は愈々厚くなつた。前の名をお元といつたので、その音を取つて望東尼と號したが、東を望むと二字を用ひたのは、とりも直さず明け暮れ京都のことを忘れぬ

大隈言道
福岡の人、歌
人、明治元
年、年七十一
歿、年七十一
堪能
深くその道に
通ずること
上手。

平尾村
福岡市の西南
郊、八幡村の大
字。

といふ心からであつた。

紅の大和錦もいろくの

絲まじへねば綾は織られず。



野村望東尼

文久元年の十一月に、望東尼は和宮（わのみや）の御降嫁の行列を拜まうとして京へ上つたが、途中海上で難風に逢つたため、期日に後れて、望を果さなかつた。しかし、僧月照を始め諸國の勤王の志士達と交を結ぶことが出来た。そして右の歌を詠んだ。私情を棄ててたゞ尊王攘夷の大目的に盡さうとする心が、優しい三十一文字になつたのである。かくて翌くる年の四月に再び故郷に歸つた。

文久
孝明天皇の年
號（五三）
和宮
親子内親王、
仁孝天皇の皇
女、徳川十四
代將軍家茂に
降嫁せられた
。、明治三十
年、御年三十
二。
月照
京都清水寺成
就院の僧、安
政五年（五〇）
歿、年四十六。

江戸幕府の勢は日にく衰へた。尊王といひ攘夷と叫んで、日本國中は煮え返るやうに騒がしくなつた。そして彼女の庵には、あの月照を始め、平野國臣、西郷吉之助、月形洗藏、鷹取養巴等の志士が絶えず往き來をして隠まはれてゐた。今の武士もその一人であつた。それは長州の奇兵隊の隊長高杉晋作その人であつた。



唯心彌陀心浄土ナカムレハ心ヲナス
唯心彌陀心浄土ナカムレハ心ヲナス
唯心彌陀心浄土ナカムレハ心ヲナス

蹟筆照月僧

望東尼の許には、和歌の弟子で吉村千秋といふ侍の娘の清子といふ十四ばかりの少女がゐた。長州から落ち延びて望東尼の庵に隠まはれてゐた晋作は、つれづれの餘り、彼女が手習をして居る傍から、

「清子どの、御身も大和魂をお持ちか。」

と、戯れるやうに尋ねた。と、清子は、稍暫く晋作を見詰めてゐたが、すぐに前の「我もまた」の歌を書いたのであつた。

裏山から靜かな鳥の聲が聞えた。

晋作はちつと二首の歌を見詰めた。潤んだ目からやがて熱い一雫がほろりと落ちた。

お恥かしう存ずる。
と頭を垂れた。
唯心彌陀心浄土ナカムレハ心ヲナス
唯心彌陀心浄土ナカムレハ心ヲナス
唯心彌陀心浄土ナカムレハ心ヲナス

蹟筆臣國野平

僅か十四歳の少女や、六十歳に近い老尼の心にも、かうした強い男らしい覺悟があるのに、いかに敵に追はれたとはいへ、大の男がおめおめと隠まはれ忍んで、安閑とした日を送るのは、餘りに腑甲斐

えみし船やが
沈めばにち
沈めばにち
沈めばにち

平野國臣
福岡藩士、元
治元年(三五三)
歿、年四十三。
(或は三十九
ともいふ)
西郷吉之助
名は隆盛、鹿
兒島藩士、鹿
治十年歿、年
五十一。

月形洗藏
福岡藩の儒
者、慶應元年
(三五七)歿、年
三十八。
鷹取養巴
福岡藩の醫、
慶應元年歿、
高杉晋作
山口藩士、慶
應三年歿、年
二十九。

がないと思はれた。彼は「死なう」と決心した。そして、急に襟を掻合せて、尼の前に両手をついた。

「お暇仕る。」

「え。」

「これまでの御芳志、改めてお禮申上げます。」

「して、此處を出て何れへお越しなされますぞ。」

「本國長州へ。」

晋作はきつと言つた。そして、今の心持を述べて、國に歸つて同志を集め、斃れるまで俗論黨と戦ふつもりだと答へた。

「もし幸に勝つことが出来申したら、それは御兩所の御志の賜と存じ申す。」

「では、立て連ねた劔の中へ。」

望東尼はぢつと晋作を見詰めた。そして、動かし難い彼の決心を見て取つた。

「勇ましい御覺悟、斷じて行へば鬼神も道を避けるとやら、御勝利は疑ありませんまい。」

「では、我儘を見遁して下さりまするか。」

「なんの。」

尼は強く頭を横に振ると、手箱から一葉の短冊を取出して、新しい筆に墨をふくませた。

惜しからぬ命長かれ櫻花、

雲居に咲かん春ぞ待つべき。

「お錢別で御座りまする。」

「重々の御志、その櫻花と散るまでも胸にかけて参るで御座らう。」
晋作は短冊を押戴いて深く内懷に仕舞つた。その内に清子は心

斷じて行へば
斷而敢行鬼神
避之。(史記)

得て、草鞋や笠を取出し、旅支度を整へた。
「おさらばで御座りまする。」
「お國のために命を惜しんで下さりませ。」



高杉晋作

二人は垣根の所まで見送つた、
と、その坂道の下から、一人の
娘が息せき駈け上つて來るの
が見えた。
「尼様、一大事で御座ります。」
その娘は遠くからかう叫んだ。
それは月形洗藏の妹の梅子で
あつた。
「お、お梅様、一大事とは何事で御座りまする。」
望東尼ははつとして尋ねた。

「捕人が参ります。」

「え。」

「高杉様の討手ぢや。」

「や。」

三人はきつとなつた。

反對派の俗論黨では、その後高杉の行方を一心に搜索してゐたが、
漸く筑前領へ逃げ込んだことだけを突き止めて、福岡藩へ捕縛方
を頼んで來た。その頃すつかり幕府方になつてゐた福岡藩では、
早速八方へ忍びの者を出して、やう／＼望東尼の庵に隠れて居る
武士がそれであることを突き止めた。そして、すぐに大勢の捕人
を差向けようとした。すると、何くれとなく高杉の身の上を案じ
て居る月形が、どうしてか運よくそれを聞き出した。「すはやつ」と
思つたが、彼もやはり今はお尋ね者同様な身であるので、妹の梅子

にそのことを言つて、急いで注進させたのであつた。
「それはようお告げ下さりました。さもなくば毒蛇の口へお立
たせするところでありました。」

望東尼は両手を合せて梅子を拜んだ。そして、晋作を招いて何か
囁くと、奥の間へ連れて行つた。

「暫く御辛抱なされませ。」

彼女はさう言つて、佛壇の下の引出から、いつの間に用意して置い
たのか、穢きたない破れた百姓の野良着を取出して、手早く晋作に着せた。
そして、臺所から鍋墨を取つて来て、構はずにその頬に塗りつけた。
見る／＼内に穢きたないなるの百姓が一人出来上つた。大きな侍鬚を
崩して、手拭で頬被をさせると、清子や梅子にまでも、それが晋作だ
とは思はれぬやうになつた。

「さ、これで宜しう御座りまする。」

尼は大小の代りに自分が祕藏の懐劍を贈つた。表へ出ると、ちや
うど近所の植木屋の娘の子の四つばかりになるのが、一人で遊び
に来てゐた。「お、なほよい」と、尼はそれを見ると手を拍つて喜ん
だ。「よい子ぢや。お前、町のお祭を見たうはないかえ」と抱き上げ
た。無心の子は両手を舉げて、「お祭、お祭」と叫んだ。

「さ、この子を負うて。」

尼は晋作にさう言つた。晋作は黙つてその子を負うて外に出た。
あとから梅子が白手拭を被つて晋作の着物の包を持つて續いた。
誰が見ても、こゝらあたりの百姓が、子供や妹を連れて城下へ出て
行く姿としか見られなかつた。

二三町行くと、果して三四十人の捕人に出逢つた。晋作と梅子は
道の傍にしやがんで、お辭儀をするやうな風をして捕人をやり過
した。誰一人怪しむ者はなかつた。虎口を逃れた二人は飛ぶや

虎口を逃れる
極めて危険な
ところを逃れ
る。

うにして福岡へ走つた。

「御用だ。御用だ。」

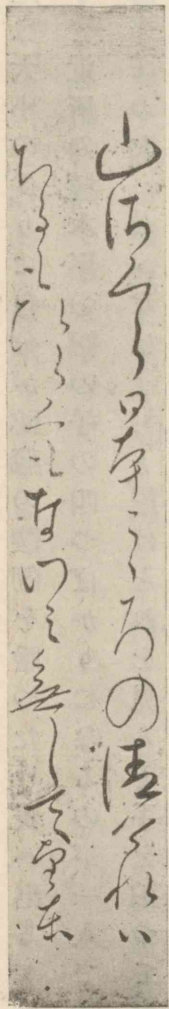
捕人はすぐに庵の八方を取巻いた。望東尼は平然として寫經を續けてゐた。清子も和歌の手習に餘念がなかつた。

「御用だ。」

張合の抜けた捕人は一段と聲をはり上げて叫んだ。尼は靜かに顔を上げた。

「何御用で御座りまする。」

「黙れ。なみくの用ではない。長州の浪人高杉晋作を隠まうた覚えがあらう。」



蹟筆尼東望村野

山ざくら日本
れちるの清け
らばちるもひ
無しくもなづ
望東

と十手を振りかぶつた。

「御座りませぬ。三間とないこの庵隈なくお探しなされませ。」

尼は眉一つ動かさなかつた。

「む、言ふにや及ぶ。」

捕人はすぐに間毎に亂入して、押入は勿論、天井を破り、疊をはね、床を穿つて見たが、とうの昔に逃れ出た晋作の姿の有らう筈はなかつた。

「む、さては早くも逃したな。何れへやつた。言へ。」

捕人の頭はすらりと刀を抜いて、尼の目の前に差出した。

「存じませぬ。」

尼はじろりと白刃を見た。しかし、顔色はやはり崩れなかつた。

「よし知つてゐようとして、一旦この身が隠まうたからは、骨が碎けて粉にならうとも行先は言へませぬ。」

と凜然と言ひ放つた。雪を凌ぐ峰の老松のやうな男々しさに、捕人は思はずたじろいだ。そして、そらした目に清子を見つけた。「では、そちは知つてゐよう。」氷のやうな刃は彼女の白い頬に觸れた。「存じませぬ。」

「や。」
「尼様さへ知られぬこと、何のわたしが知つてゐませう。」

少女は鈴のやうな朗かな優しい聲で答へた。しかし、微塵も揺がぬ魂は、三十人の捕人の氣を呑んで了つた。「む、」と捕人どもは息をつめて口惜しがつた。しかし、六十歳に近い老尼や十四歳の少女を對手に太刀も振れないので、羽拔鳥のやうにすごとくと城下へ歸つて行つた。

植木屋の娘の子はその日の中に綺麗な着物を着せられ、駕籠で送

凜然
威嚴の鋭いさま
たじろぐ
しりごみする

られて歸つて來た。それから二月と経たぬ中に、高杉晋作等の奇兵隊は俗論黨を悉く討伐して、長州の天地には再び勤王の旗が翻るやうになつた。しかし、尼の身の上には恐ろしい悲運が廻つて來た。慶應元年夏七月、平尾村の松林に鳴く蟬の聲を驚かして、一隊の兵士は蝗のやうに尼の庵を取圍んだ。それは晋作始め數多の志士達に助力したからであつたが、差當つては、太宰府に流されて居る



七 落 脚

三條公その他の公卿達に密かに拜謁したからであつた。三條壬生澤四條東久世三條西錦小路の七人の公卿は、勤王攘夷を唱へたために幕府に嫌はれ、都に住み兼ねて長州へ落ち、其處で隠まはれてゐた。これが歴史に名高い七卿落である。しかし、その長州も一時俗論黨の天下になつたため、あはれにも頼む木蔭に雨の洩る心地で、病死した錦小路卿、他國へ走つた澤卿の外の五人は囚人として菅公の昔と同じ太宰府に流された。太宰府は福岡からは同じ國の内のこととてさう遠くはなかつた。勤王の志の厚い望東尼はその事を聞いて、庵に落着いて居られなかつた。彼女は姿を變へて屢々太宰府へ行つて、密かに右の公卿達に拜謁してお慰め申上げた。それが端なくも洩れ聞えたので、福岡藩の兵士に襲はれたのであつた。望東尼はもう言譯をしなかつた。

三條 名は實美。
壬生 名は基修。
澤 名は宣嘉。
四條 名は隆諤。
東久世 名は通禱。
三條西 名は季知。
錦小路 名は頼徳。

浮雲のかゝるもよしや武夫の

大和心のかずに入りなば。

とばかり口吟んで、従容として縛に就いた。「わたしも一緒に」と、清子は泣いて尼に取纏つたが、聽されなかつた。尼の駕籠は揺られ、て海邊まで擔がれ、そこから小舟に乘せられて、玄海灘の孤島姫島に棄てられた。同時に、月形洗藏始め二十餘人の同志は無慚にも斬られて了つた。「お、天道眞を照らし給はぬか。」尼は我が身のこととは忘れて、此等の人々の死を悲しんだ。そして、指の血で供養のために經を書寫した。また、

おくれゐて書くもかひなし法の文、

よみがへり來んつてならなくに。

と和歌を認めて、密かにその遺族に贈つて慰めた。

島の秋が来た。

秋の夜の晴れたる空の月見ても、
心にかゝる雲のうへかな。



額田六福

と詠じた。

冬が来た。何の圍ひらしい圍ひも
ない孤島の牢屋には、風も、雪も、浪の
しぶきも、洩るがまゝに身を濡らし
て、肉も骨も凍り果てるかと思はれ
た。しかし、尼は毫も節を屈しな
かつた。雨につけ風につけて思ふのは、たゞ大君のことばかりであ
つた。そして、その心のあとは和歌になり文になつて、やがて三卷
の「比賣島日記」になつた。
一年は夢のやうに過ぎた。やがてまた秋が島の朝夕に音づれた。

そして、一夜激しい野分が草木を吹き盡すかのやうに吹き渡つた
時、突然小山のやうな浪間から一隻の小舟が現れて、矢を射るやう
に島の渚へ漕ぎ寄せた。あはやと思ふ間に、黒装束の武士が四五
人ばら／＼と砂上へ飛び上つた。

「おのれ曲者？」と、島守の番卒は手に／＼棒を持つて打つてかゝつ
たが、すぐにたゞき伏せられて了つた。と忽ち一人は掛矢で、牢屋
の格子をはつしと打つた。細い格子は一打でばら／＼に壊れた。
「それ？」と曲者は一散に中へ飛び込むと、驚く老尼を小脇に抱へて、
元の小舟へと疾風のやうに走り出した。島の者が残らず篝火を
持つて集つた時分には、小舟の影はもう長州沖の
方へ消えて了つてゐた。

額田六福自署

尼を奪つたのは、筑前の浪士藤四郎親茂と、あの高杉晋作とその一

新島 福

掛矢
大きな木槌。

味とであつた。晋作はまづ下關の邸に尼を入れて、母のやうに大事にかしづいてゐたが、そこは筑前に近いので、更に周防の三田尻に移して一層丁寧にもてなした。清子もやがて呼ばれて、昔のやうに介抱する身となつた。慶應三年になつて彼女は病を得た。毛利公は彼女の志を憐んで、屢藩醫を差遣はされて、懇ろに介抱させられたが、天命はどうすることも出来ず、同じ年の十一月十三日に、多くの志士達に圍まれながら靜かに瞑目した。年六十二。明治二十四年の暮に正五位を追贈された。

花浦の松の葉白く置く霜と

消ゆるはあはれ一盛りかな。

これが辭世であつた。

慶應
孝明・明治兩
天皇の年號。
(二五三―二五七)
毛利公
名は敬親。

採は蔽冬雪降るかに。

ほくまじ寒梅にほひや比ふ。

譽も千尋淵なる谷に。

潜めし幽蘭をうりに似るか。

みづ波は蒼溪波まく淵よ。

かざやく白玉光といづれ。

阿、君見らざる。尊上の績。

あ、君聞えぬ。至高のほきま。

あ、君知れざる。究竟の採。

大なる國民君より起る。

涙よなすけに採よ愛に。

阿、きみはやさき女性の力。(東海游子吟)

土井晚翠

土井晚翠
名は林吉、
豪市の人、
治四年生、
文學者、
高等學校
教授。

七 母たるべき爲に

三宅やす子

私達女性は母たるべき爲に生れて来て居る。やうく歩み初める頃から枕、それがなければ座蒲團を二つ折にしてでも、自分の着物を着せて、紐で負つて、ねんくよう。と、襦袢も取れないお母さんぶりを發揮する事は、女の誰でもが必ず経過して来た道程であらう。「お飯事、姉様ごっこ、幼い時の無心の遊戯にも、女は家庭を中心として、母と云ふ事、子と云ふ事に心持を支配されて居るのである。女として眞に生くべく、母」と云ふ名は實に絶大の力を持つて居る。夫を助ける事が、女性に取つて楽しく且意義のある務ではあるが、更に母として子供の成長を見守る事が、女性のあらゆる希望の中で、一番熱烈なものであると言はねばならない。

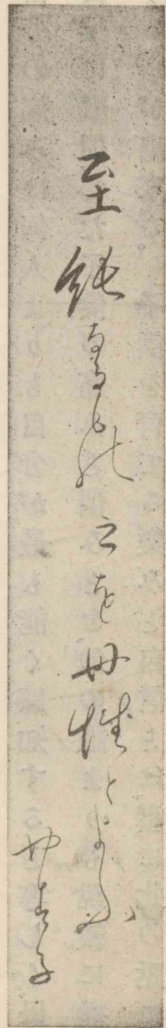
母たる尊さは、又強さは、子供に取つて、母以外に母のない事である。育兒の爲にどんな苦みどんな悲みを感じずる事があつても、母がか

三七やす子
故郷學博士三
宅恒方の妻、
京都市の人、
明治二十三年
生、著述家。

ほどまでに苦しく感ずる事を、母以外の誰が之を忍んで盡してやるであらうか。」と自ら反問する時、そこにあらゆる困苦に對する限りのない勇氣が湧いて来る。

祖母だとか、叔母だとか、姉だとか、又は子供好きの人達によつて、子供は母に似た慈愛を経験する事は出来る。併し、それらの人達の愛は、單に母の愛に似た愛に止まつて、到底母の愛とは比較にならないほど稀薄なものである。宇宙の中で自分一人が子供に對する絶対の愛の所有者であると思ふ時、又子供が保護を受けに甘えて來るべき唯一の人であると思ふ時、眞に生命に對する執着が強められて、しみじみと自己の生の力強さを感じずる事が出来る。

自分の痛みは何人よりも自分が最も能く感知すると等しく、母は、自分に酷似した子供の痛みと悩みとを、他の誰よりも鋭敏に推知する事が出来る。子供を育てる樂みと自信とは、實に此の點に存



三宅やす子筆蹟

至純なるものを母性とする

するのである。自分と自分の最も能く知つて居る夫との素質を受けた子供に對して、自分の缺點と夫の缺點との芽をなるべく摘んでやりたいと思ふのが母たる者の誰でも希望であり、更に其の長所は出来るだけ伸ばしてやりたいと思ふのが其の熱望である。そして、それを最も能く盡しおほせる人は母であるから、母は子供を活かす唯一の人であらねばならない。過ぎ去つた自分の生涯の懐かしく惜しまれる時に、我が子供の將來を想像して限りのない希望を抱く事は、何と云ふ樂しさであらう。母としては子供になるだけ種々の物を與へたいと思ふ。そ

れには勿論財産も重要な物の一つではあるが、就中、親が踏んで來た道の上に横たはつて居る様々の躓つまずきとなる石を、容易に踏み越える事の出来る力をしつかりと與へて置きたいと云ふ事は、眞に母の痛切な願望でなければならぬ。さりながら、全世界に唯一人の信賴される者として、「良い母」となるべく、私達は餘りに其の實力を缺いて居るのを悲しく感ずる事がある。そして又、子供を愛する力は、母が自然に與へられて居る美しく且根強いものであるにも係らず、どうかした時、不圖之を裏切る、自ら憎むべき、淺ましい心の閃く事が、どうして無いと言ひ切られよう。寢食を忘れて子供の爲にばかり盡す努力がやがて實を結んで、子供がそれ、一人前になつた時、或意味で、今までの密接な母子の關係から離れねばならない事を想像する時には、限りのない寂し

みも湧いて来るけれど、鳥獸でさへ、蟲けらでさへ、親が子を可愛がるのは自然である。況して人間が子を愛し育てるのに、義務的觀念を持つのは全然間違である。子を育てると云ふ事、それ自身の持つ言ひ難い言はば一種の快樂を、私達は、より高く、より美しく、より尊いものとして完成したいと思ふ。

八 息女への教訓

鳥丸光廣

一筆申し参らせ候。然れば、そもじ幾千代の色も變らぬ常磐木の枝を連ぬる御祝として、よそへ越し給ふべきこと、誠に目出たう覺え参らせ候。申すまでは候はねども、身持やさしく、心おとなしく、さざれ石の巖となりて、苔の蒸すまで繁昌して、孫子の末末までも御榮え候やうにと打願ひ参らせ候まゝに、筆に任せて

鳥丸光廣 江戸時代前期の人、寛永十五年(三九〇)年六十歳に薨す。我が君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔の蒸すまで、古今知らず、(讀人集)

申し参らせ候。

第一、慈悲の心ありて人を憐み、蟲獸の上までも露の情を懸け給ひ、表はたゞ青柳の絲の風に靡くが如く物柔かにして、人の心を酌み知り、僻める心を押直し、御嗜みなさるべく候。さてまた、心



鳥丸光廣

の中は石や金よりも堅く、あだなる心を持ち給はぬこと肝要にて候。忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えず。とあれば、くれぐれ此のことわりを朝夕心に掛け給ひ候はば、神や佛の御守もおはします

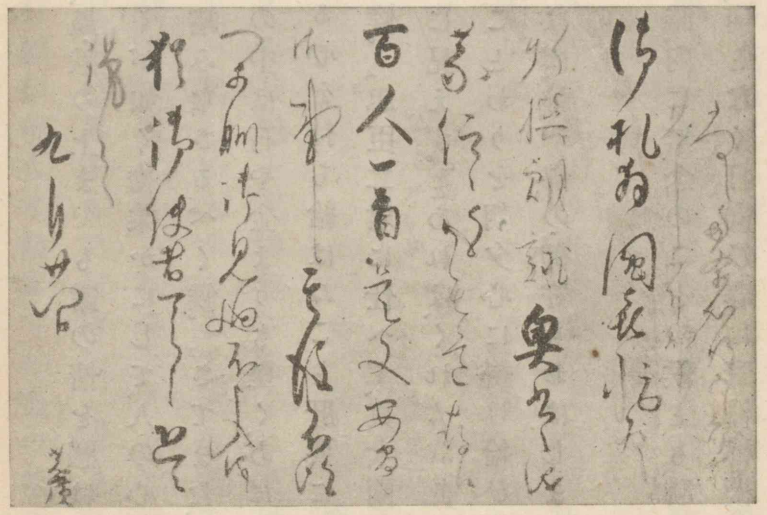
忠臣云々 忠臣不事二君、貞女不更二夫。(史記)

べく候。

第二、まれ人など御渡り候はん時、内に無念のこの候とも、聊かその氣色をつゆほども見せず、何となく打向ひ、春は青柳梅櫻鶯、

雲雀、夏は卯の
花、菖蒲、橘、杜鵑
螢、秋は月、紅葉
霧、蟲、鹿、冬は雪
霜、霰、翼、鴨、鷹、い
づれもその折
に觸れたる物
語などして、懇
ろに取りはや
し給ふべく候。
さりとして、年若き人のあまり睦
しげなるも、外目いかゞあるべ
き。たゞ何となくなぞらへて、

尙々兩條心得存候、
朗詠見事之御本出申
候
御札拜聞喜悅存候、新
撰朗詠典書之儀蒙仰
候、得_レ其意存候、百
人一首是又安間之御事
候、其後不_レ得_レ閑暇、
御見廻不_レ申入儀候、
猶御使者可_レ被_レ申候、
恐々謹言
九月廿八日
光廣



鳥丸光廣筆蹟

とかくしのぎなきやうに愛々しく候はんことこそあらまほし
く候へ。

第三、召使ふ人の疎略にて、何事も思ふやうになく候とも、忍びや
かに諭し言をもいひ聞かせ給ふべく候。それをも聞き入れず
候はば、責め誠めもあるべく候。さりとして、あるじなどの聞かせ
給ふところにては口惜しく候。いかにみめ姿うるはしき兒女
房なりとも、腹を立てたる顔は見にくきものにて候。しかも若
き人の聲高に怒り候體、淺ましく候。さて諭し言をも聽くまじ
きものと思ひ給はば、里へ返し候はば、さのみ苦勞もあるまじく
候。男も女もあまり短氣に候うては難も出來、召使はれ候者も
他所へ悪しきやうに名を立て、後には逃げ去るものにて候。

*吉野なるなつみの川の川淀に、
鴨ぞ鳴くなる山蔭にして。

吉野なる
湯原王の歌、
新古今集にあ
る。

と詠める歌の心は、吉野の川は早く候、鴨は水の上に住むものなれども、あまり早き處には住み難く、川淀とて水の淀む處に遊ぶとなり。況や人間の烈しきところには長らへ難く候。

第四、夫婦の間、高きも低きも睦しく候はんことこそ、他所の聞えも宜しく、心にくうも侍らめ。たとひ幾千代を送り給ふとも、聊かもあるじに見落されぬやうに朝夕嗜み候はんには、いよ／＼千秋萬歳を保ち給ふべく候。さてまた、無念のこともさのみ思ふべからず。たゞ世の有様をつら／＼と見て、心をものどやかに過し給ひ候はば、行末よきことのみにてあるべく候。歌に、
事足らぬ世をな恨みそ鴨の足の

短くてこそ浮ぶ瀬もあれ。

さてまた、心に掛けて習ふべきは筆の道にて候。いかなる位高き人中にても、おめずしてしとやかに書きなしたるは、いと氣高

吉野川
の川の上

事足らぬ
道歌。

く見ゆるものにて候。上にも下つ方にも、無手に候はば、不自由なるのみかは、その身も賤しく成りさがるものにて候。「我人の用に立ちなんものは、第一鳥の跡なり」と、或書にも見え候ま、常御稽古ありたく候。殊更和歌は家のものなれば申すに及ばず候へども、尋常に氣高く、四季に應じて御詠みあるべく候。男も女もよろづにつけて身持心遣ひ肝要に候。善きが上にも善きやうに願ひ参らせ候。
あまり山鳥の尾の長々しく書き列ね参らせ候。なほ重ね／＼御祝の數々申し承り候べく候。めでたく、かしこ。

自修文

九 男女の分業

野上俊夫

男子と女子とは、其の身體に於ても、其の精神に於ても、大なる差異

野上俊夫
新潟縣の人、
明治十五年、
生、心理學者、
文學博士、
京都帝國大學
教授。

があつて、結局男子は外に出て働き、女子は内に在つて働くやうに
出来て居ることは疑はれない。

女子の最大任務は、己の後繼者たるべき子女を生み、出来るだけ之



野上俊夫

を完全圓滿に發達させて、次代を己等の時代よりも一層優れたものにするのである。随つて、生存競争場裡に活躍するのに必要な腕力や智力は、比較的男子より劣つて居るけれども、一方に、將來の後繼者を育てるのに必要な尊い濃やかな愛情を豊かに賦與されて居るから、此の點に於ては到底男子の追従を許さない。

之に反して、男子は主に優勝劣敗の生存競争場裡に馳驅して、己の生活を向上増進させ、同時に、己及び妻子の生命を保護し、食物其の

後繼者
あとをつぐ人。

活躍
いきよくと働く。

賦與
分け與へる。

馳驅
はせまはる。

他必要な品を獲得するのを本務として居るから、子女養育の任務に對しては、女子に比して著しく不適當なことを免れない。之を概言すれば、男子は現在の爲に生き、女子は將來の爲に生きるといふことが出来る。是は男女自然の分業であるから、男子と女子とは何れが尊く何れが卑しいといふべきではない。たゞ仕事の種類が異なる爲に、心身活動の有様が相違して居るのに過ぎないのである。併し、女子だからとて必ずしも悉く結婚するものではなく、結婚しない女子の數は文化の進歩と共に次第に増加する傾向さへある。此の傾向の決して喜ぶべきでないことは言ふまでもないけれども、とにかく現在に於ては、年々女子獨身者の數の多くなるのが文化國の一般の状況である。更に又、結婚した女子が悉く子を生むとも限らず、其の出産率も亦文化の進歩と共に次第に減少する傾

出産率
子を産む歩合。

向がある。但し、大體から言へば、此等のことは勿論少數の除外例たるに止まるのであつて、女子の大部分はやはり相當の年齢に於て結婚し、そして、結婚した女子の大部分はやはり子を生むのが事實であるから、少數の除外例を以て多數を律すべきでないのは言ふまでもない。

前述の如く、女子は將來の子孫の爲に生きるものであるとし、子を生み子を育てることが女子の大切な任務であるとするならば、女子は此の大任務遂行の爲に、其の心身の精力の大部分を傾け盡すのであるから、たとひ他の方面に於て男子に及ばないにしても、それは當然過ぎるほどの當然であつて、決して恥辱ではない。妊娠十箇月の間、女子の心身には種々の故障や變化が起つて、到底男子と同様に十分の活動をするには出来ない。又出産後一箇年間授乳や子供の大小便の世話などで、殆ど日もこれ足りない有様

除外例

遂行
しとげること。

授乳
子に乳をのませること。

である。それから、子供が次第に成長して、間斷なく活動し廻るやうになれば、全く目を離す暇もなく、更に

野上俊夫

野上俊夫自署

間斷
たえま。

四五歳以上になれば、其の發育して來る知識を開發する爲に、非常に努力せねばならない。唯一人の子供に對してさへさうである。まして二三年おきに一人づつ子を生むとすれば、それらの子供を完全に育てるのには、其の全精力を傾け盡しても足りないぐらゐである。随つて、女子が男子と同様に世間に出て活動することは到底出来るものでない。若し女子が一方に於て育兒の大業をやりながら、他方に於て男子同様な世間的活動が出来るとすれば、女子は男子に比して著しく優れた人間である譯で、到底男女が同權で社會を作ることとは出来ず、男子は悉く女子の奴隸となつて了はねばならないやうになるだらう。

此の如く觀じ來れば、女子が男子のやうに世間的に活動することが出來ないでも、それは決して女子の不名譽ではない。女子が男子には到底出來ない所の子女養育の大任務を有するが爲にさうなつて居るのである。即ち男女の心身にかやうな根本的分業があるのである。随つて、其の分業によつて男女がそれ／＼己に最も適した仕事をするのが、兩者各自の幸福にもなり、やがてまた社會全般の利益にもなるのである。勿論此の點に於ても例外は多いから、女子でも、獨身のもの、或は結婚しても餘力のあるものは、男子と同様に、或は男子以上に、知能をも磨き、世間的活動をもし、才能のあるものは出來るだけ之を助長發揮するがよい。併し、それは飽くまでも例外に過ぎないことで、其の女子自身に取つても、それが果して最も大なる幸福であるかどうかは疑問である。

發揮
あらはす。

一〇 病院

大町桂月

寒禽の聲絶えて、冬の夜やう／＼更け行くまゝに、吹き荒ぶ木枯の風身に浸みて、木々のたゞずまひ怪しく、雲間を縫うて走る片破月かすかなる光を洩らして、老松時にをろちの影を横たへ、穗に出でて招きし尾花の床荒れて、人目さへ枯れ果てたる古池の側、打寄する漣、苔蒸す巖を噛みて、餘沫、落葉の上に嘯き、爪先上りの小路、霜柱に鎖されて、踏むに聲あるもいと寂し。あはれ、國破れて山河あり。といひけん、世に時めきし大守の殿閣既に跡方もなくなりて、遺愛の樹木空しく榮えぬ。松風よなく、玉琴の絲に通ひて、木蘭の舟常に幾隊の紅裙を載せけんそのかみの豪華一炊の夢に歸して、烟波なほ愁を含めるに、短籬を隔てたる幾宇の聖壁、呻吟の聲に埋れて、こゝに二豎に苦しめらるゝもの、いくそばくといふことを知らず。篝燈の影仄暗くして、廻廊のあたりに登音あるは、みとりの女

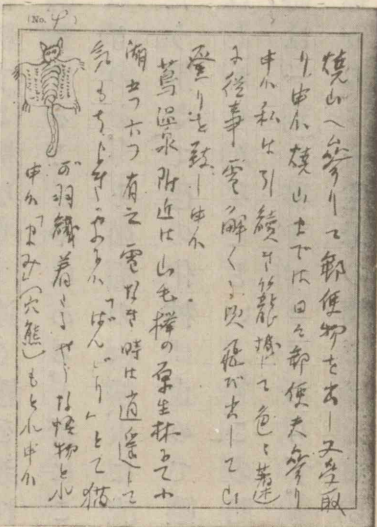
大町桂月
名は芳衛、高
知縣の人、文
四年、大正十
七、年五

國破れて
國破山河在、
城春草木深、
感時花濺淚、
恨別鳥驚心、
烽火三月連、
家書抵萬金、
白頭搔更短、
渾欲不勝簪、
(杜甫)

の歩むにや。咳嗽の聲手に取る如く聞ゆるにつけても、懷舊の情
うたゝ止みがたく、九泉の下に眠れる人のこゝに病に悩みし様、さ
やかに目睫の間に浮び出づるを覺ゆ。

年久しく親しみし家の若き夫人の、風邪の心地とて打臥しけるが、
病は氣管支に移り、遂に肺に入りければ、病院に入りてぞ療治しけ
る。病院に入りし時、國手は診断して、「もはや治すべからず」といへ
り。されど、夫人は治すべからずとは知らざりしのみならず、肺を
病めることすら知らざりけり。この時なん年の暮なりける。夫
人はいへり、「春を迎へなば我が病は癒えん」と。やがて春を迎へぬ。
されども夫人の病は癒えず。またいへり、「梅咲く頃に至らば癒え
ん」と。梅は咲きぬ。されども病は癒えず。またいへり、「櫻咲く頃
に至らば癒えん」と。櫻も咲きぬ。されどもなほ癒えず。かゝり
しほどに、他に悩むところ出で来ければ、手術を受けしに、出血止ま

ず、病勢一頓
して、纔かに
奄々たる一
縷の氣息を
存するばか
りとなりぬ。
絶えぬ、な
る聲して、ありし
人々にこの世の
暇乞して眼を塞
ぎけるが、暫くし
て眼を開き、眸を
前後左右に轉じ



大町桂月筆蹟

燒山へ参りて郵便物を出し
又受取り申候、燒山までは
日々郵便夫参り申候、私は
引續き籠城して色々著述に
従事、雪解くる頃飛び出し
て山登りを致し申候
萬温泉附近は山毛櫛の原生
林にて小湖五つ六つ有之、
雪なき時は逍遙して氣もち
よき處に候、「ばんどり」と
て猫が羽織着たるやうな怪
物とれ申候、「まみ(穴熊)
もとれ申候、いづれも頗る
美味に候
今夜は舊の十一月二十七日
に候、故郷の愚姉申し來り
て曰く、今夜は月の出に阿
彌陀様がお現はれになるか
ら拜めとの事に候、愚姉は
佛教信者にてそれを信じ居
り候、私は信じ申さず候へ
ども、親は既に之なく兄妹
とて生き残れるは唯姉と弟
との二人、その姉が南國に
見て姉を偲ばむとて徹夜い
たし居り申候

て、あたりに立てる人を見渡し、眼を閉ぢ、また暫くして眼を開きて、あたりの人を見渡せり。かくすること二三回、辛うじて聲を出して、「嬢は嬢は」といふ。「先に人を遣りて呼び参らせたれば、程なく來り給はん」といへば、いと嬉しげに眼を閉ぢぬ。暫くしてまた眼を開きて、「嬢は嬢は」といふ。かくすることまた三四回に及びければ、見るに、え堪へで、車を飛ばしてその家に至るに、嬢の乳母は鏡ども取出でて化粧する様なり。「速く嬢を連れて來よといひこしたるに、一刻も猶豫することやはある。折にこそよれ。夫人の命は刹那も待たぬものを。その額の白粉、水に流して、疾く／＼行きぬ」といへば、いたう驚きて、己の化粧は止めて、嬢の衣はあれやよけん、これやふさはしからんなどといふを、この期に及びて着物を選ぶべしやは。時は一刻も移すべきにあらず。そのまゝにて、はやはや、とて出し遣りぬ。一生母の顔をばえ知らざるべき幼女に向ひ

ていかなる遺言かありけん。あはれ、咲き出でたる櫻の花は未だ散らざるに、夫人の花の姿は早くも無常の風に散りにけり。

その亡骸の未だ柩に收まらずして、逆屏風の下にありしほど、夫人平生、銀杏返を好みたればとて、侍女泣く／＼夫人の髪を銀杏返に結びぬ。鴉鬢、蟬鬢、光澤ありて麗しきことは生前に異ならねど、鸞離れ鳳別れて、幽明界を異にするものを、今更に誰がためにか粧はんとする。棺中に金氣は禁物なりとて、金の指環は織手より抜き去られて、三途さんずの川の渡賃にとて、錢形を捺したる幾片の紙は添へられつ。陰風、鬼火を吹いて、月魄、腥き處、枯れ残りたる生花、ありし世の涕を留めて、一杯の土長く無常の露に霑へり。あはれ、歲月東流の水に歸して、人生は浮漚うきわらに異ならず。末の露、本の雫、おくれさきだつ例には洩れぬ人の身の上、歡樂極まり易くして、哀情長く忘れ難く、こゝに癒えにし人もこゝらあれど、今つばら

三途の川
人が死んで閻
魔の廳に赴く
途中にあると
いふ川。

にその名を覚えぬ。たゞはかなくなりし人のみ思ひ出されてや
る方もなきに、風ひとときは身に浸みて、夜はいたう更けぬ。遠寺の
鐘に送られて、いづち行くらん、月を掠むる孤雁の聲いとあはれな
り。(帝國文學)

一一 今様五題

一 舊き都

舊き都を来て見れば、
浅茅が原とぞ荒れにける。
月の光はくまなくて、
秋かぜのみぞ身にはしむ。

二 萬劫年ふる

萬劫年ふる龜山の
下は泉のふかければ、
苔むす岩屋に松生ひて、
梢に鶴こそ遊ぶなれ。

三 松の木蔭

松の木蔭に立ちよれば、
千年の緑ぞ身にはしむ。
梅が枝かざしにさしつれば、
春の雪こそふりかゝれ。

四 一天四海

治まり靡く時なれど、
一天四海のうちのみか、
人の國まで日の本の
唐土が原もこのところ。

五 蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる
萬歳千秋かさなれり。
松の枝には鶴巣くひ、
巖のそばには龜遊ぶ。

一一 新島守

四月二十日帝^{*}おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。近頃みなこの御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院號のさだめありて、今おりさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄の院をば中院と申し、父帝をば本院とぞきこえさする。このほどは家實のおとゞ關白にておはしつれど、御讓位の時道家のおとゞ攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。

さても院のおぼし構ふること、忍ぶとすれどやうく漏れ聞えて、^{*}ひがしざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつくかれを御勘じのよし仰せらるれば、御方に参りつるつはものども、押寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院はおぼしめ

四月二十日
承久三年(二
八二)
帝
順徳天皇。
春宮
仲恭天皇。
御兄の院
土御門院。
父帝
後鳥羽院。
家實
近衛家。
道家
後京極良經の
子。
あづまの若君
當時の將軍頼
經。
^{*}ひがしざま
この時の執權
は北條義時。

しける。

あづまにもいみじうあわてさわぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻め來りなん時に、はかなきさまにて屍をさらさじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、おのれをこのたび都にまゐらすは、思ふところ多し。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろ見えなんには、親の顔また見るべ



後鳥羽天皇

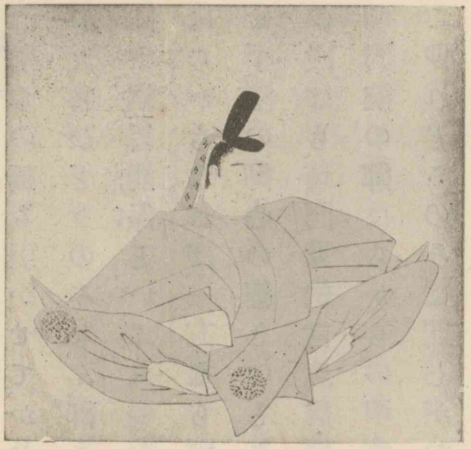
からず。今をかぎりと思へ。賤しけれども義時君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死にをせんことはあるべからず。心を猛く思へ。おのれ打勝つものならば、ふたゝびこの足柄箱根は越ゆべし。など泣くゝいひきかす。まことにしかなり。また親の顔拜まんこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎりとははれに心細げなり。



土御門天皇

かくて打出でぬるまたの日、思ひがけぬほどに、泰時たゞひとり鞭をあげて馳せ來たり。父胸うちさわぎて、「いかに」と問ふに、軍のあるべきやう、おほかたのおきてなどは、仰のごとくその心を得侍り

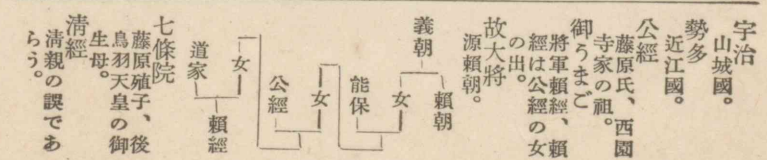
ぬ。もし道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らんに参加あへらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。この一ことをたづね申さんとて、ひとり馳せ歸り侍りき。」といふ。義時とばかり打案じて、「かしこくも問へるをのこかな。そのことなり。まさに君の御輿に向ひて弓をひくことはいかゞあらん。さばかりの時は、兜を脱ぎ弓の弦を切つて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせてまつるべし。さはあらで、君は都におはしましたながら軍兵をたまはせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし。」といひも果てぬに、いそぎ立ちに



順徳天皇

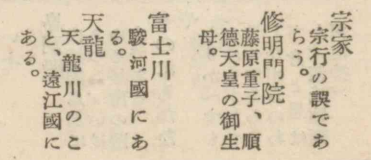
からで、君は都におはしましたながら軍兵をたまはせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし。」といひも果てぬに、いそぎ立ちに

けり。都にもおぼしまうけつることなれば、ものゝふども召しつどへ、宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用心ことなり。公經の大將ひとりのみなん御うまごのこともさることにて、北の方一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕きこととあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ／＼あまたきこゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじり立つ人々、このほかの上達部にも殿上人にもあまたありき。中院はあかで位をすべり給ひしより、言にいでてこそ物したまはねど、世のいと心やましきまゝにかやうの御さわぎにも殊にまじ

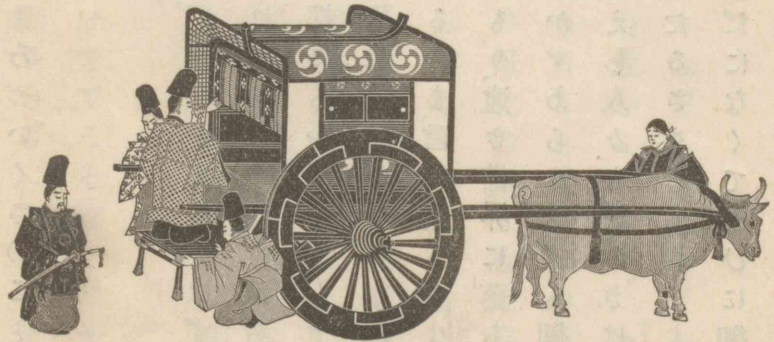


らひ給はざめり。新院はおなじ御心にて、よろづいくさのことなども掟ておほせられけり。

いつの年よりも五月雨晴間なくて、富士川、天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打渡しがたければ、攻めのぼる武者どももあやしくなやめり。かゝれども、遂に都にちかづくよしきこゆれば、君の御武者も出で立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉もおよばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべてやすげなく騒ぎ満ちたり。いかゞあらんと君も御心みだれておぼしまどふ。かねては猛く見えし人々も、誠のきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまども、頼もしげなし。六月十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、つひに御方

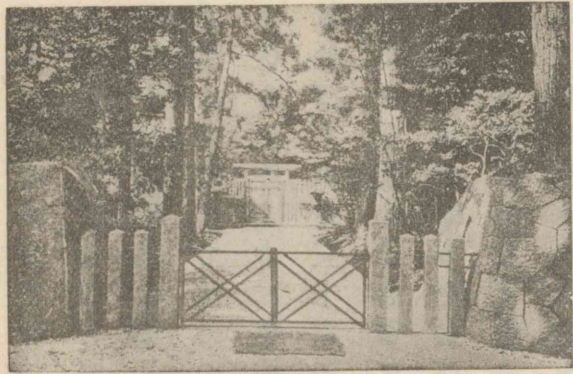


のいくさやぶれぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下ただ物にぞあたりまどふ。
あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷したてまつるべしときこゆれば、女院宮々所々におぼしまどふことさらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日いらせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや。」



網代車

保元のためし
果崇徳上皇の結
讃岐國へ遷し
奉つたことを
いふ。
鳥羽殿
山城國鳥羽に
あつた、鳥羽
宮である。離
ものにもがな
や
とりかへすも
のにもがなや
世の中をあり
しながらのわ
が身と思は
ん。(源氏物語
河海抄)



真野陵

とおぼさるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御としよそぢに一つ二つやあまらせ給ふらん。まだいとほしかるべき御ほどなり。信實朝臣召して御姿うつしか、せらる、七條院にたてまつらせ給はんとなり。かくて同じき十三日に、御船にたてまつりて、遙かなる波路をしのぎおはします御心地、この世のおなじ御身とおぼされず。いみじう、いかなりける代々のむくいにかとうらめし。新院も佐渡國に移らせ給ふ。上達部殿上人、それより下はた残るなく、このことに觸れにしたぐひは、重く軽く罪に當るさまいみじげなり。中院は初よりしるしめさぬことなれば、あづまに

信實
藤原氏。

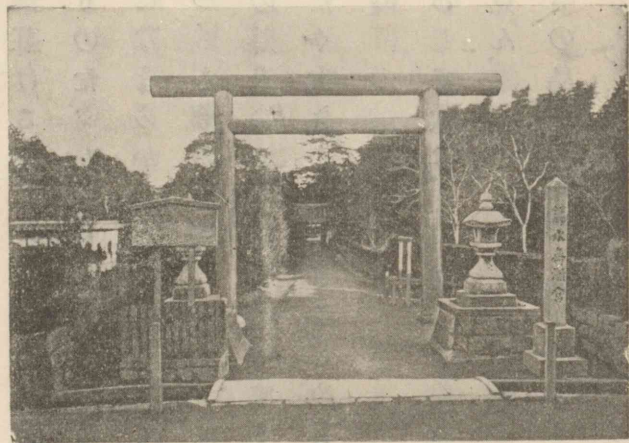
○真野陵は順
徳天皇の御火
葬所で、新潟
縣佐渡郡真野
村大字真野に
ある。

もとがめ申さねど、父の院遙かに移らせ給ひぬるに、のどかにて都にてあらんこといとおそれありとおぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐國の畑はたといふところに渡らせ給ひぬ。本院は六つにて位につき給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下はおなじことなりしかば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして、萬機つみのまつりごとを御心ひとつにをさめ、百の官つかさどをしたがへ給へりしそのほど、吹く風の草木をなびかすよりもまされる御有様にて、遠きをあはれみ、近きをなで給ふ御めぐみ、雨の脚よりもしげければ、津つの國のこやのひまなき政をきこしめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射はくこしゃくの山の峰の松もやうく、枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞のほらの御住居、いく春をへても、空ゆく月日のかぎり知らずのどけくおはしましぬべかりける世を、ありあ

畑 土佐國の西南にある幡多郡に中世は貴佐人の配所とされたる。

津の國のこやとも人をいふべきに、隙こそなけれ、葦の八重葦やえあし、(和泉式部、後拾遺集)

りてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、おのが散り散りにさすらへ、磯の苫屋に軒を並べて、おのづからこととふものとして、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙のなびくかたをも、わがふるさとのしるべかとばかり眺め、すごさせ給ふ御住居どもは、それまでと月日をかぎりたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさに、いと心ぼそかるべし。ましていつをはと、かめぐりあふべきかぎりだになく、雲の浪、煙の浪のいくへとも知らぬ境に世を、すぐし給ふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。



水無瀬宮

○水無瀬宮は大阪府三島郡島本村大字廣瀬にあって、その祭神は後鳥羽・土御門・順徳の三天皇である。

このおはします處は、人ばなれ里とほき島の中なり。海づらよりはすこしひき入りて、山かげにかたそへて、大きやかなるいはほのそぼだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに柴のいほりのたゞしはしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめかしく、ゆるぎてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今さらめきたり。しほ風のいとちたく吹きくるをきこしめして、

われこそは新島守よおきの海の
あらしなみ風こゝろして吹け。

同じ世にまたすみのえの月や見ん、

けふこそよそにおきの島守。(増鏡)

柴のいほり
まづこにも住
住まざらば
柴の庵のし
しなる世に
古(西行法師、新
古今集)
水無瀬殿
後鳥羽天皇の
殿、津國三
島郡本村大
字廣瀬にあつ
た。
二千里の外
三五夜中新
月色、二千里
外故人心。(白
樂天、和漢朗
詠集)

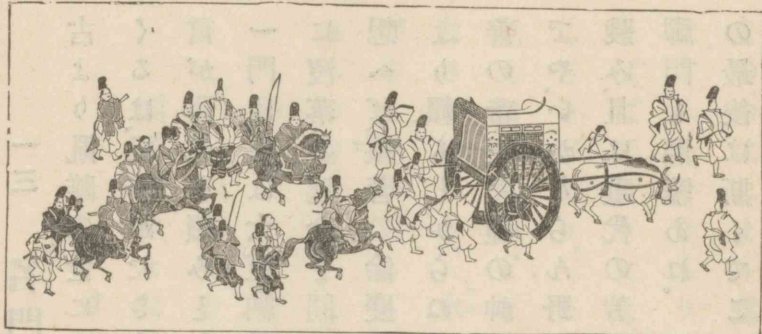
一三 名門の最後

高山樗牛

古より亂離の世には反覆の人あるを免れず、安きを求め危きを選くるは、己みがたき人の情なればなり。さもさうず、一の池殿大納言が舊恩を頼みとして兵衛佐が芳心を望みしを外にして、平家の一門は、上は大臣納言より、下は衛府諸司の掾に至るまで、ともく没落の運命を同じうせしこそゆゝしけれ。想へば、積善の餘慶既に家に盡き、積悪の餘殃早く身に及べり。固より頼もしからぬ行末かけて、何をか望み何をか願はん。たゞ十善の帝王三種の神器を帶して、今ぞ一門の末路に立たせ給ふ。いでや、いかならん野の末海の果までも行幸の御供申し、先世の契を踐み、且は重代の芳恩に應へなんす。あはれ、故入道大相國淨海大禪門も照鑒あれ。世は是非なうも武運の末とこそ覺ゆれど、名門の最後は斯くてこそあるべけれ。げに名門の最後は斯くてこそ

高山樗牛
名は林次郎、
山形縣の人、
許論家、文學
博士、明治三
十五年歿、年
三十二。
池殿大納言
平頼盛、忠盛
の子、清盛の
異母弟、清盛は
池禪尼、權大
納言。
兵衛佐
右兵衛佐源頼
朝。
積善の餘慶
積善之家、必
有餘慶、積不
善之家、必有
餘殃。(易經)

入道大相國
太政大臣平清
盛。



平家の都落(春日権現験記)

あるべかりけれ。凡そ邦家の滅亡必ずしも麗しからず。たゞ平家の没落に至りては、何物の美かよくこれに類ふべき。源氏の興亡の如き、東夷あづまひびすの品下れる、いふばかりなし。重代の仇未だ報いざるに、同門の隙早く開け、四海僅かに一に歸すれば、鬨の禍直ちに起る。兵衛佐はげに智謀に長けたる大將なりしかども、みやびたる優しき心つゆばかりも持たざりき。我執あまりに強かりければにや、嫉深く心僻めり。されば、讒奸や、もすれば骨肉の間に入り、一族の連枝、時に路傍の人にも劣れり。權勢いくばくもなく家臣の手に落ち、宗祠早

く祀を絶てども、一人の義に殉ひ恩に死するものなし。此の如くにして兵威何の頼むところぞ、利運何の喜ぶところぞ。此の如くにして衰亡する、誰かまた一掬の涙を濺ぐものぞ。盛衰興亡はもと人事の常、むしろ深く喜憂するに足らざらん。たゞその運命に當るの人心優しく情麗しからば、何の幸慶かよくこれに加ふべき。あゝ、我をして時を同じうせしめんか、願はくは、源氏となりて興らんよりも、むしろ平家となりて亡びなん。

平家はさすがに名門のこととて、没落の際まで大義名分を執りて動かざりしは、ゆゑしくもまたあはれの極みなりき。木曾*は兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ひて院宣乞ひ受けられども、孤軍もとより勝算なし。乃ち使を西國に立て、合體して兵衛佐討つべきよしを言ひ送りぬ。平家の答はかくなりき。

木曾
源義仲、壽永
三年(八四四)
歿、年三十一。

よしや世は季になりぬとも、木曾なんどにかたらはれて、いかでか都に上るべき。畏くも十善の帝王三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須らく甲を脱ぎ弦を外し、來りて軍門に降るべし。さらば、東國征討の御供にも加へらるべきか。

あゝ、何ぞその言辭の堂々として亡落のやからに類はざるや。平家人に乏しきも、一時の權變を弄びて頼勢を廻さんとだに思はば、かゝる時こそ乗すべき機會なれ。さるを、名分の正しきを執りて、

吾人は須らく現代を
超越せざるをうらす

高山林次郎

高山樗牛筆蹟

成敗の數を顧みず。若し偏に利害の眼よりすれば、迂は即ち迂ならんも、かくして滅びんは詬こを含みて存たもへんよりも、いかにばかり麗しかるべき。その太宰府をに落ち行くや、緒方が

緒方の三郎名は維義。

吾人は須らく現代を超越せざるべからず高山林次郎

の三郎使して申しけるは、

「まことに重代の芳恩を思はざるにあらざれども、一院の仰もだしがたければ、九國に置き奉るべき地も候はず。」

平大納言乃ち衣冠束帶して、出で向ひて宣ひけるは、

「それ我が君は天神四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ。祖宗歴代の神靈我が君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元平治以來度々の逆亂を鎮めて、九州のものどもをば皆内ざまへこそ召されしか。然るを、何ぞや、かゝる重恩をも打忘れて、東夷の下知に従ふこそ奇怪至極なれ。」

本三位の中將一の谷に捕はるゝや、院宣屋島に下りて、かうぞ傳へける。

「三種の神器都に上せよ、重衡を放ち還さん。」
平家の請文こそまことに壯大ならびなかりしか。曰く、

一院 後白河法皇。

平大納言 平時忠、清盛の妻時子の兄。
我が君 安徳天皇、高倉天皇の皇子、壽永四年（八五五）崩御、御年八歳。

本三位の中將 平重衡。
一の谷 攝津國須磨の西、鐵拐が嶽の南。
屋島 讃岐國。

院宣謹みて承り畢んぬ。通盛卿以下、一の谷にて討たれけるもその數少からず。何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三種の神器は、正統の天子一日も御身を離し給ふべきにあらず。抑、我が君は故高倉の院の讓を受けさせ給ひてより、に四年、東夷北狄の禍に遭ひて、暫く西國に行幸あるのみ。天に二日なく、國に二君なし。還幸なからんに於ては、神器などか都に還るべき。抑、頼朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申し宥められしところなり。然るに、忽ちにしてこの鴻恩を忘れて、妄りに干戈を弄ぶ。神罰やがてその身に返るべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして、早く西國の御幸あるべきか。一門の武運こゝに盡きなば、鬼界高麗天竺震旦の果までも罷りなん。悲しいかな、人皇八十一代が間、傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の

通盛の子。平氏、教盛の

高倉の院 第八十代、後白河天皇の第五皇子、養和元年(八四〇)崩御。御年二十

鬼界 大隅國大島郡に屬する島、大島の東方、周回七里。

宗盛 清盛の第二子。

寶とならんとは。宗盛頓首謹みて申す。かくて平家は亡びき。亡びしまでも、成敗のためにその名節を枉ぐることをなさざりき。あはれ、平家の世盛りはまことに大いなりしが、その没落の更に大いなるには及ばざりき。麗しきかな平家、かくして亡びたりとて何の恨むるところぞ。(樗牛全集)

自修文

一四 高山樗牛氏を懷ふ 近松秋江

私はこの節東海道興津清見潟の海岸に避暑に參つてゐますが、今晩はこちらで皆様に對してラヂオの放送を頼まれましたので、一寸歸京した次第であります。私はまだ自宅にラヂオの機械を設備してゐませんから、どの程度の音聲でお話し申したならば、皆様によく聴き取れますか、その邊は甚だ心許ないのであります。が、鬼

近松秋江

本名は徳田浩司、岡山縣の生、明治九年、興津、靜岡縣。

今晩 大正十四年八月五日。

當時の東京放送局、今は東京中央放送局といふ。

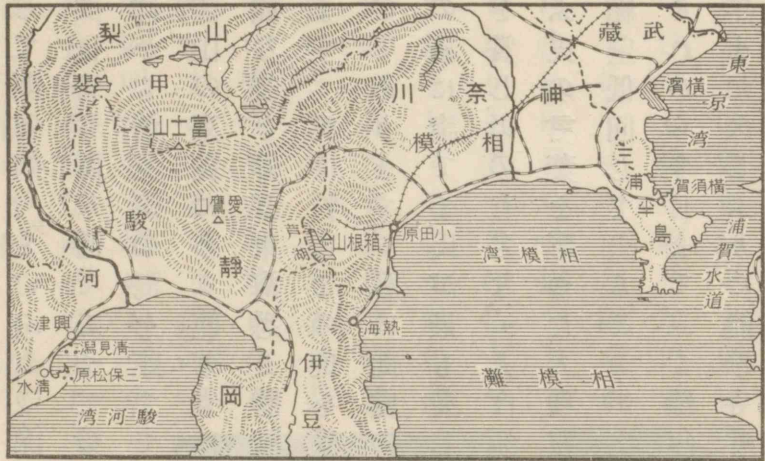
に角是から「高山樗牛氏を懐ふ」といふ題について、私の考を少しばかりお耳に入れます。

今日は一般思想界及び文藝思想界が二十餘年前とは随分變つてゐますから、多くの人の中には、或は今から二十餘年前に物故した高山樗牛氏については、記憶もなく、また興味も有してゐない方があらうと存じます。けれども、一部の青年男女の間には、氏は今日もなほ依然として生きてゐます。興津清見潟は氏が生前最もその風光を愛した處であ



清見潟

物故
死ぬ。



りまして、今日でも若い人達の胸に共鳴を與へて居るあの多感多涙な「我が袖の記」といふ美文は、この清見潟の明媚な自然が氏の胸にインスピレーションを起して出来たものであります。また氏の感想文の中で最も出色なものの一つである所の「姉崎嘲風に與ふる書」の冒頭の一節に、「三月、君が西航の首途を横濱に送りたるの日、予は西の方嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。この夜、月明かに星稀に、一灣の風露恍と

明媚
美しく鮮かなこと。

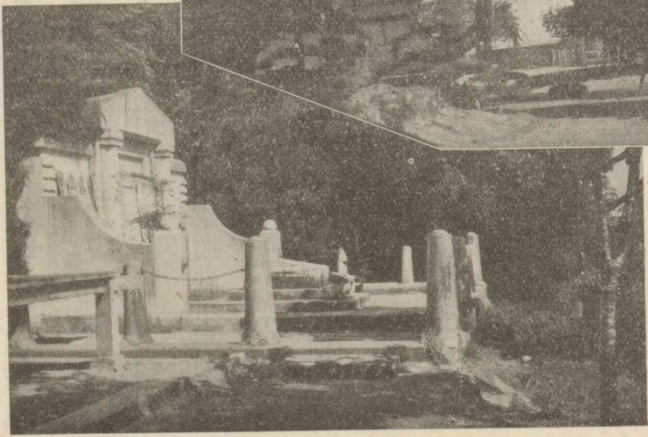
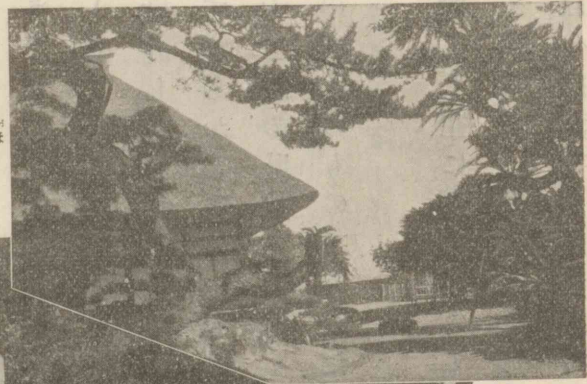
姉崎嘲風
名は正治、
都市の人、
治七年、
博士、
東京文
國大學
教授。
冒頭
文章の書き
こし。
三月
明治三十
三年。
函嶺
箱根。
恍
うつとり。

して夢の如し。といふ、あの流麗な名文は、それが発表された當時、私共は青春爛たぎな時であつて、愛讀諷誦ふうじゆ、片時も措きませんでした。興津から清見瀉の灣を距へたてて、あの徳川家康を祀つてある駿河の久能山くさの東麓にある龍華寺りやうげは、三保灣の入江を控へ、間近に富岳の秀麗な姿を仰ぎ、東海悉く勝區の中でも、最も風景の優れた處であります。氏は特にこの地を愛し、遺言をして此處を埋骨の地としたのであります。私は此處の墓域が修せられた翌年か、始めてその墓に詣でて、氏が最も愛したといふ清水市郊外の富士見の風景を賞し、あの有名な、吾人は須らく現代を超越せざるべからず。といふ氏の言葉を彫ほつた大理石の墓標の畔ほとりに立つて、靜かに氏を懐ひ、願望低回して去ることが出来ませんでした。それから今日まで二十餘年の歲月が過ぎました。そして、私は今年また久しぶりに龍華寺畔の氏の墓に詣りました。聞く所によ

諷誦
そらでふしを
つけてよむこ
と。

願望
ためらふ。
低回
首をたれてさ
まよふ。

ると、この墓に詣るものは今日でも跡を絶たないさうであります。勿論それは多くは若い人達ださうであります。これによつて見ましても、二十餘年前に亡くなつた氏は、その著書によつて今日もまだ其等の青年男女の胸に生きて居るのであります。日本の明治の文壇にも、文名一世を蓋うた大家、名流が随分輩出しましたが、死後二十餘年を隔てて、なほ若い人達の



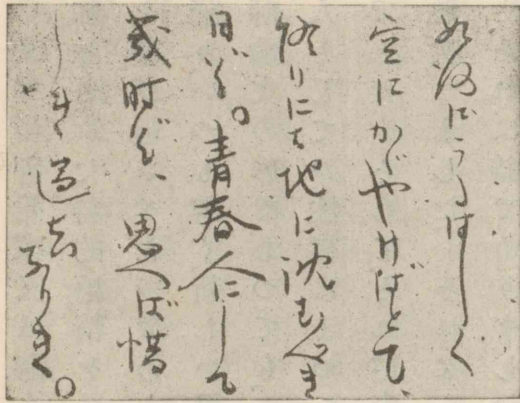
↑ 龍華寺
— 高山樗牛の墓

胸に深く共鳴を興へて居る文士はさう澤山はありません。それならば氏の書いたものはどんな内容を持つて居るかと申しますと、それは甚だ若い心持であります。ですから、相当年を取つた人達には、さまでの感興を起させるものは或は無いかも知れません。また氏の書いたもので、主として大人に讀ませるべき種類のものでも、精確な研究によつて批評しましたならば、勿論杜撰つづねなものもあるといふことであります。しかし、氏の生命は其處にあるのではありません。僅かに三十二歳の壯齡で天折てんせつした氏の全生命は、一口に申しますと、若い心の人そのものであつた、青春そのものであつたのであります。

生前の作の一つに、いかに麗しく空に輝けばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にして幾時ぞ。思へば惜しき過去なりき。といふのがありますが、これは今繪葉書になつてゐまして、龍華寺で

杜撰 著作に誤の多いこと。
天折 わかじにする。

人に頌ほめつてゐます。これは極めてセンチメンタルな意味の感想で、現實の世界に向つて大いに生きようとする人にとつては、俄に同感し難い所もありますが、しかし、凡べての人は、青春の時期には、とかくかやうな感情に支配されがちなるものであります。



高山樗牛筆蹟

如何にうるはしく空にかやけばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にして幾時ぞ、思へば惜しき過去なりき。

死後二十餘年を経た今日に於て、日本の文學史上に於ける一個の文士としての氏の特質を思つて見ますと、氏は評論家ではあつたが、結局一個の詩人であつたのであります。その詩人としての氏は、色々な新しい感情を當時の文壇に於て吐露とろし、氏以前

吐露 あらはしるべし。

の文學の評論家又は詩人よりも遙かに新しく、そして、西洋思想の加味された詩的感情を吐露して、當時の青年に甚しく清新な氣持を喚び起させたのであります。氏は青春そのものであります。通り、いつも若く、新しい思想の持主でありました。書いた事柄は評論文の形であつても、その中の言々句々は悉く筆者その人の詩人としての性格によつて裏付けられてゐないものはありませんでした。そして、それが青年の胸に高遠な思想と熱烈な感情とを鼓吹しました。それならば、氏の理想は何であつたかと申しますと、それは詩でありました。詩とはいふものの、その本質は極めて茫漠たるものであります。しかし、詩はそれでよいのであります。例へば、墓碑に彫られて居る「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」といふ言葉も、その意味は極めて不明瞭なものであります。が、しかし、それも、吾々は現代に生きてゐても、それに没入せず、一

裏付ける
たしかにす

茫漠
ぼんやりして
ゐるさま。

段と高い處に立つて、それを批評的に見なければならぬ。」といふ意味に解してよいと思ひます。そして、その青春の早く過ぎ去ることを悲しみ、或はあの平家の悲壯で美しい滅亡に同情するといふやうな、古來東洋の詩人に通有な哀愁を哀愁そのものとして愛するといふやうな所もありましたが、同時にまた、強い意志を感情化して讚美するといふやうな所もありました。今日なほ龍華寺の墓に青年男女の詣るものが跡を絶たないのは、前申しましたやうに、若い心の持主である氏が、いかに其等の次々生れて來る若い人達の胸に永久に生きて居るかといふことを物語るものでありまして、それは私が今申したやうなことを分析して氏の事業を批評するより、一個の詩人としての氏をその著書によつて味はつた方が適當であります。氏の書いたものを詩として見ますと、その内容は前申す通り稍漠然とはしてゐますが、批評家として當時の

哀愁
うれひかなし
むこと。

でもまだ青年男女に愛讀されて居る「瀧口入道」といふ美文體の歴史小説を書いて、漸く二十二三歳で忽ちにして文名が都門に高くなつてゐました。この一代の才人に、生前に於て接見することが



高 山 樗 牛

出来ましたのは、今考へて見ましても、私に取つて非常な悦であつたのであります。樗牛氏を知らない人のために、少しくその風采態度を申しますなら、あの「樗牛全集」の巻頭にある寫眞の通り、實に立派な凛乎として威嚴のある風采の紳士でありました。私の知つてゐます限りでは、その文章の壯麗なことと、その風采の整然として居ることとが、氏のやうに最もよく合致して居る人はありません。こ

凛乎
威嚴のあるま

の點に於ても實に渾然とした天成の文士であり詩人であつたと思ひます。で、私がこの夏清見潟に参りましたのも、一つにはさういふ思出を新にするためであるのであります。甚だつまらないことを申しまして、御清聴を煩はしました。

渾然
缺點のないさま

一五 古調新調

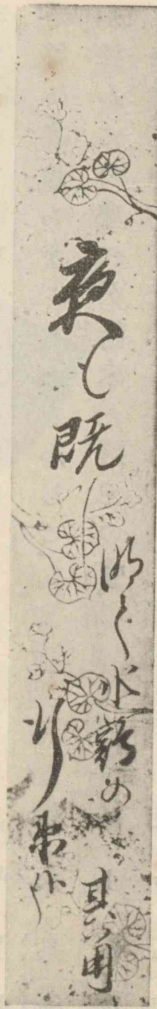
元朝や神代のことと思はるゝ、
手をついて歌申上ぐる蛙かな。
冬籠り蟲けらまでもあなかしこ。
お静かに御座れ夕陽未だ残んの雪。
青麥や雲雀があがるあれさがる。
古池や蛙飛びこむ水の音。
荒海や佐渡に横たふ天の川。

荒木田守武
山崎宗鑑
松永貞徳
西山宗因
上島鬼貫
松尾芭蕉
同人

松永貞徳
貞門の祖。
西山宗因
談林の祖。
上島鬼貫
伊丹派。
古池や
以下十二句元
祿調。

雲雀より上に休らふ峠かな。
夕涼みよくど男に生れける。

松尾芭蕉
榎本其角



蹟筆角其本榎

黄菊白菊その外の名はなくもがな。

服部嵐雪

應々といへどたゞくや雪の門。

向井去來

雁の聲おぼろくと何百里。

各務支考

悔みいふ人のとぎれやきりぐす。

内藤丈草

長松が親の名で來る御慶かな。

志田野坡

ながくと川一筋や雪の原。

春花園凡兆

四條から五條の橋や朧月。

森川許六



蹟筆來去井向

缺さげて叱りに出るや桃の花。

岩田涼菟

春の海ひねもすのたりとかな。

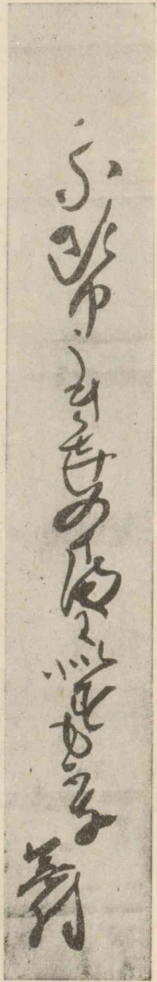
與謝蕪村

さしぬきを足で脱ぐ夜や朧月。

同人

化けさうな傘かす寺の時雨かな。

同人



蹟筆村蕪謝與

山路來て向ふ城下や風の數。

炭太祇

馬借りてかはるぐに霞みけり。

大島蓼太

曉や鯨の吼ゆる霜の海。

加藤曉臺

夜も既に明て
水鶏の行衛哉
其角

春の海
以下十句は天
明調。

我頭巾うき世
のさまに似ず
もがな 蕪村

霧深し何呼ばりあふ岡と舟
美しや春は白魚かひあり菜
枯葦の日にく折れて流れけり。

高井几董
加舎白雄
高桑關更

秋來ぬと目にさや豆の太りかな
尻べたの蚊をうつ芋の葉風かな
東海道残らず梅となりにけり。
名月や江戸のやつらが何知つて。

大伴大江丸
建部兼兆
夏目成美
小林一茶
本居宣長

一六 玉勝間抄
一 書よむことのたとへ

本居宣長

秋來ぬと目に
秋來ぬと目に
はさやかに見
えねども風の
音にぞ驚かれ
ぬる。(藤原
敏行、古今集)
尻べたの
以下文化文政
前後の調。
本居宣長
伊勢國の人、
江戸時代後期
の國學者、享
和元年(一四一)
歿、年七十二。

さみだれやあ
る夜竊に松の
月 蓼太

須賀直見がいひしは、廣く大きな書をよむは、長き旅路を行くがごとし。面白からぬところも多かるを經行きては、また面白く目さむる心地する浦山にも到るなり。また足強き人は早く、弱きは行くこと遅きもよく似たり。とぞいひける。をかしたとへなりかし。

須賀直見
伊勢國の人、
宣長の高弟。

二 富み榮えを願はざること

世々の儒者、身の貧しく賤しきを憂へず、富み榮えを願はず、喜ばざるをよきことにすれども、そは人のまことの心にあらず、多くは名を貪る例のいつはりなり。まれく、にさる心ならんものありとも、そは世のひがものにこそあれ、なにのよきことならん。ことわりならぬふるまひをして、あながちに願はんこそあしからめ、ほどほどにつとむべきわざをいそしくつとめて、なりのぼり富み榮え

んこそ、父母にも先祖にも孝行ならめ。身おとろへ家まづしからんは、上なき不孝にこそありけれ。たゞおのがいさぎよき名を貪るあまりに、まことの孝を忘るゝは、もろこし人のつねなりかし。



本居宣長

三 書うつし物書くこと

書をうつすに、同じくだりのうち、あるは並べるくだりなどに、同じ詞のあるときは見まがへて、そのあひだなる詞どもを寫し洩らすこと、常によくあるわざなり。また一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、そのあひだ一ひらを見ながら落すこともあり。これら常に心すべきわざなり。またよく似て見まがへ易きもじなどは、ことにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これは寫しがきのみにもあらず、おほかた物か

くに心得べきことぞ。

すべて物を書くは、事のこゝろを示さんとてなれば、おふな／＼も

此は... (Calligraphy by Honjo Naoyuki)

本居宣長筆蹟

此つくゑは... (Small text block)

じさだかにこそ書かまほしけれ。さるを、ひたすら筆のいきほひを見せんとのみしたるは、いかなることとも讀みときがたきがよに多かる、あぢきなきわざなり。常に書きかはす消息文なども、もじ讀みがたくては、いひやるすぢゆきとほらず、讀む人はた苦しみて、かしらかたぶけつ

つ、かへさひ讀めども、つひに讀みえずなどしては、こゝ讀みがたし
とかへし問はんもさすがになめきやうなれば、たゞおしはかりに
心得ては、事たがひもするぞかし。

四 手かくこと

よろづよりも手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ學問など
する人は、ことに手あしくては心おとりのせらるゝを、それ何かは
苦しからんといふも、ひとわたりことわりはさることながら、なほ
あかずうちあはぬ心地ぞするや。
宣長いとつたなくて、常に筆とるたびにいとくちをしう、いふかひ
なくおぼゆるを、人のこふまゝに、おもなくたんざく一ひらなど書
き出でて見るにも、我ながらにいとかたはに見ぐるしうかたくな
なるを、人いかに見るらんと、はづかしくむねいたくて、若かりしほ

どになどて手習はせざりけんといみじうくやしくなん。

五 物知り人の物の理を論ふやう

世の物知り人、人の身の上、世の中の理ことわりなどを、さまざま、心高く、いと
かしこげには論あひつちへども、といふも、かくいふも、皆からぶみのおもむ
きにて、その垣つ内を出づること能はざるはいかにぞや。

一七 冬

麗しき衣を捨てよ。

はかなき思出を捨てよ。

今は

凡べての物の

内にと目覺むる冬なれば。

川路せい子



川路せい子
妻、東京市
人、明治三十
年生。

こがね色なる花も凋み、
赤き寶もうれて朽ちたり。

今はたゞ

真裸の種子となり、

暖き落葉の中に埋れて、

つゝましき夢を甞む時。

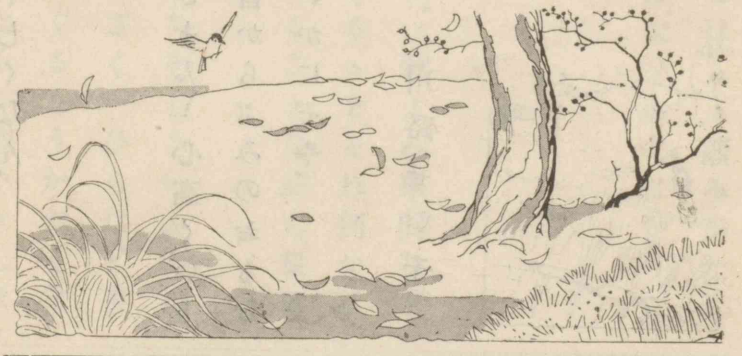
悩ましき涙を捨てよ。

囚はれの思を捨てよ。

今こそは

凡べての物の

内にと目覺むる冬なれば。



一八 落花の雪

落花の雪に踏み迷ふ、かたの交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かすほどだにも、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が古里の妻子をば、行方も知らず思ひおき、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀れなる。

憂きをばとめぬ逢坂の、関の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏み鳴らす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかと哀れなり。

時雨もいたくもり山の、木の下露に袖濡れて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜の間にも、おいその森の下草に、駒を駐めて顧み

○本課は元弘元年(九一七)月、藤原俊基の東下りの條である。
落花の雪 野のみの見交、またや見交、春の曙、藤原俊成、新古今集。
交野 河内國。
紅葉の錦 朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦着ぬ人ぞなき、藤原公任、拾遺集。
關の清水 逢坂の關の清水に影見えて、今やひくらん、望月の駒、(紀貫之、拾遺集)駒もとゞろと、眞物たえず、なふる東路の勢多の長橋の音、(平兼盛、風雅集)。

る、故郷を雲や隔つらん。
番場醒が井柏原、不破の關屋は荒れ果
てて、なほ漏るものは秋の雨、いつか我
が身のをはりなる、熱田の八劔伏し拜
み、汐干に今やなるみ瀉、傾く月に道見
えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はい
づくととほたふみ、濱名の橋の夕汐に、
曳く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身
にしあれば、誰か哀れと夕暮の、いりあ
ひなれば、今はとて、池田の宿に着き給
ふ。元暦元年の頃か、とよ、重衡中將の
東夷のために囚はれて、この宿に着き
給ひしに、



(筆塘翠瀨長) 旅の道海東

うねの野
近江より朝立
のち来ればうね
の野にたづね
鳴くなるあけ
ぬこの夜は、
(大歌所の歌、
古今集)
時雨も
白露も時雨も
いたくもる山
は下葉残らざ
色づきにけり。
(和真之、
古今集)
不破の關屋
人住まぬ不破
の關屋の板庇
荒れにし後は
たゞ秋の風、
(藤原良經、新
古今集)
なるみ瀉
さよ千鳥聲こ
そ近くなるみ
瀉傾く月に潮
やみつらん。
(藤原季能、新
古今集)
元暦
安徳天皇の年
號。(一八四)
重衡
平清盛の子、

東路の埴生の小屋のいぶせきに、

ふるさといかに戀しかるらん。

と、宿の主人が詠みたりし、そのいにしへの哀れまでも、思ひ残さぬ
涙なり。

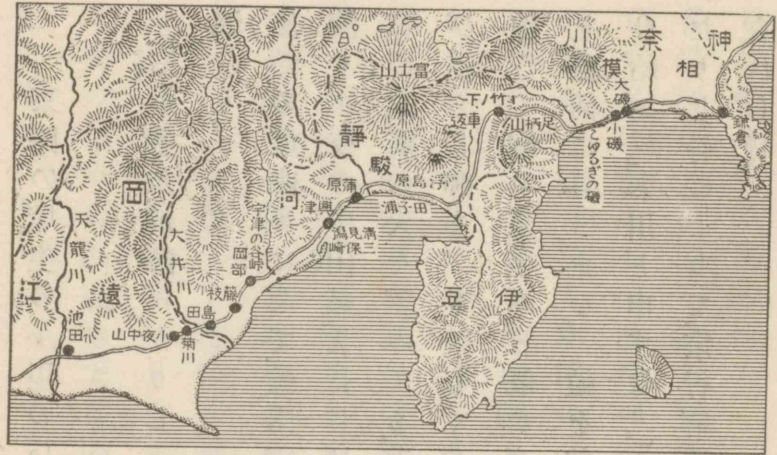
旅館の燈幽かにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打
渡り、小夜の中山越え行けば、白雲道を埋み來て、そことも知らぬ夕
暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、再
び越えし跡までも、羨しくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日既に亭午に上れば、乾飯進らするほどとて、輿
を庭前に昇き止む。轅を敲きて警固の武士を近づけ、宿の名を問
ひ給ふに、菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書き
たりし咎によりて、宗行卿關東へ召し下されしが、この宿にて誅せ
られし時、

壽永四年(一六
四) 歿、年二十
九。

命なりけり
年たけてまた
越ゆべしと思
ひきや命なり
けり小夜の中
山。(新古今
集)

承久の合戦
承久三年(一
一八二)
宗行卿
中御門中納言
藤原宗行。



昔南陽縣菊水。汲下流而延齡。
 今東海道菊川。宿西岸而終命。
 と書きたりし、遠き昔の筆のあと、今は
 我が身の上になり、哀れやいとゞまさ
 りけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ
 書かれける。

古もかゝるためしをきく川の
 おなじ流に身をや沈めん。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を
 聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花ざ
 かり、龍頭鷄首の舟に乗り、詩歌管絃の
 宴に侍りしことも、今は再び見ぬ夜の
 夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。島田

南陽縣云々
 支那南陽縣の
 故事、上流の
 菊があつてに
 その滴が流に
 落ち、それを
 飲つと長壽を
 保つといふ。

龜山殿
 山城國葛野郡
 嵯峨の龜山離
 宮。今の天龍
 寺。



藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れ
 て、物悲しき夕暮に、宇都の山べを越え
 行けば、葛楓いと繁りて道もなし。昔
 業平の中將の、すみかを求むとて、あづ
 まの方へ下りて、夢にも人に逢はぬな
 りけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ
 知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都
 に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いと涙
 を催され、向ひはいづこ三穂が崎、興津蒲原打
 過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪のなかより
 立つ煙、上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松
 見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や浅き舟
 浮けて下り立つ田子のみづからも、うき世を

岡べの眞葛
 歸り來るほど
 はなけれど朝
 露の岡部の眞
 葛うら枯れに
 けり。藤原爲
 家。

業平
 在原氏、阿保
 親王の第五
 子、歌人、元
 慶四年(西曆
 及四年五十六
 夢にも人に
 駿河なる宇都
 の山べのうつ
 つにも夢にも
 人にあはぬな
 りけり。伊勢
 物語)

清見瀉
 清見瀉浦風寒
 き夜なうは
 夢もゆるさぬ
 浪の關守(院
 大納言典侍、
 新撰撰集)

上なき思
 富士のねの煙
 もなほぞ立ち
 のぼる上なき
 ものは思なき
 けり。藤原家
 隆(新古今集)



(會圖所名道海東) 宿の川菊

めぐる車がへし、竹の下道
行きなやむ、足柄山の峠よ
り、大磯・小磯見おろして、袖
にも波はこゆるぎの、いそ
ぐとしもはなけれども、日
數積れば七月二十六日の
暮ほどに、鎌倉にこそ着き
給ひけれ。 (太平記)

下り立つ
袖ぬるこ
ちとかつは知
りながら下り
立つ田子の自
らぞうき。(源
氏物語)
こゆるぎの
こゆるぎの
そたちならし
磯菜つむめざ
しぬらすな沖
に居れ波。(古
今集、相模歌)

一九 隅田川

ワキ詞「是は武藏國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ、人々を渡
さばやと存じ候。又此の在所にさる仔細あつて、大念佛を申す事
の候間、僧俗を嫌はず、人數を集め候。其の由皆々心得候へ。」
ワキ

ワキ
隅田川の渡
守。ワキツレ
旅人。
シテ
梅若丸の母。
子方
梅若丸の靈。

ツレ次第、末も東の旅衣、末も東の旅衣、日もはるく、の心かな。詞「か
やうに候者は都の者にて候。我東に知る人の候程に、かの者を尋
ねて只今罷り下り候。道行、雲霞あと遠山に越えなして、あと遠山
に越えなして、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、此處ぞ名
に負ふ隅田川、渡りに早く着きにけり、渡りに早く着きにけり。
詞「急ぎ候程に、是ははや隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟
が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。如何に船頭殿、舟に乗らうず
るにて候。ワキ、なか、の事、召され候へ。先づ、御出で候後
の、けしからず物騒に候は何事にて候ぞ。ワキツレ、さん候。都より
女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ワキ、さや
うに候はば、暫く舟を留めて、かの物狂を待たうずるにて候。
シテ、げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、
今こそ思ひ白雪の、道行き人に言傳てて、行方を何と尋ねらん。聞

人の親の
人の親の心
闇にあらねど
も子を思ふ道
に迷ふとは、
聞か、後撰集
か、藤原兼
輔、後撰集
聞、如何に
聞くや如何に
上の空なる風
すだにも松に
は、(宮内卿、
新古今集)

くや如何に、上の空なる風だにも。地、松に音する慣あり。シテ、眞葛が原の露の世に。地、身を恨みてや明け暮れん。シテ、是は都北白河に、年経て住める女なるが、思はざる外に、一人子を人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の跡を尋ねて迷ふなり。歌、千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、固よりも契假なる一つ世の契假なる一つ世の、其の中をだに添ひもせで、此處や彼處に親と子の、四鳥の別これなれや。尋ぬる心のはてやらん、武藏國と下總の中にある隅田川にも着きにけり、隅田川にも着きにけり。シテ、詞、なう／＼我をも舟に乘せて給はり候へ。ワキ、お事はいづくよりいづかたへ下る人ぞ。シテ、是は都より人を尋ねて下る者にて候。ウキ、都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此の舟には乘せまじいぞとよ。シテ、うたてやな、

隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ、舟に乘れ。とこそ承るべけれ。かたの如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも覺えぬ事な宣ひそよ。ワキ、詞、げにく、都の人とて、名にし負ひたる優しさよ。シテ、なう其の詞は、此方も耳にとまるものを、かの業平も此の渡りにて、名にし負はばいざ言問はん、都鳥我がおもふ人はありやなしや。と。なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ、あれこそ沖の鷗候よ。シテ、うたてや

眞言の原の露の世に、身を恨みてや明け暮れん。シテ、是は都北白河に、年経て住める女なるが、思はざる外に、一人子を人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の跡を尋ねて迷ふなり。歌、千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、固よりも契假なる一つ世の契假なる一つ世の、其の中をだに添ひもせで、此處や彼處に親と子の、四鳥の別これなれや。尋ぬる心のはてやらん、武藏國と下總の中にある隅田川にも着きにけり、隅田川にも着きにけり。シテ、詞、なう／＼我をも舟に乘せて給はり候へ。ワキ、お事はいづくよりいづかたへ下る人ぞ。シテ、是は都より人を尋ねて下る者にて候。ウキ、都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此の舟には乘せまじいぞとよ。シテ、うたてやな、

日も暮れぬ
渡守「はや船
に乘れぬ」(伊
勢物語)

な、浦にては千鳥とも云へ鷗とも云へ、など此の隅田川にて白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。ワキ、げに〜誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで。シテ、沖の鷗と夕波のワキ、昔に返る業平も。シテ、ありやなしやと言問ひしも。ワキ、都の人を思ひ妻。シテ、わらはも東あづまに思ひ子の、行方を問ふは同じ心の。ワキ、妻を忍び。シテ、子を尋ぬるも。ワキ、思は同じ。シテ、戀路なれば。地、我もまたいざ言問はん都鳥、いざ言問はん都鳥。我が思ひ子は東路に、ありやなしやと、問へども〜答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。げにや舟競ふねあそびふ、堀江の川の水際みぎはに、來居つゝ、鳴くは都鳥。それは難波江これは又、隅田川すみがはの東まで、思へば限りなく遠くも來ぬるものかな。さりとは渡守、舟ふねこぞりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守、さりとは乗せてたび給へ。ワキ、詞「かゝる優しき狂女こそ候はぬ。急いで舟に乗り候へ。此の渡り

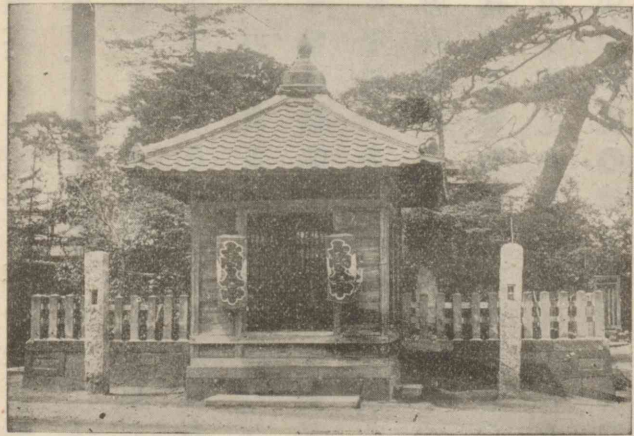
舟競ふねあそびは、堀江の川かみのみなぎはに來居つゝ、鳴くは都鳥みやまどりか、(大伴家持、萬葉集)

は大事の渡りにて候。構へて靜かに召され候へ。ワキツレ、なうあの向ひの柳の下もとに、人の多く集りて候は何事にて候ぞ。ワキ、さんの候。あれは大念佛にて候。それにつきて哀れなる物語の候。此の舟の向ひへ着き候はんほどに、語つて聞かせ申さうずるにて候。さても去年三月十五日、しかも今日こんにちに相當りて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひ取つて奥へ下り候が、此の幼き者、未だ習はぬ旅の疲にや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、此の川岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、此の幼き者をば其のまゝ、路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間、此の邊の人々此の幼き者の姿を見候に、よしありげに見え候程に、様々にいたはりて候へども、前世の事にててもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、お事はいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の何某

と申しし人の唯一人子にて候が、父には後れ母ばかりに添ひ参らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうに成り行き候。都の人の足手影も懐かしう候へば、此の道のほとりに築きこめてしるしに柳を植ゑて給はれ。」とおとなしやかに申し、念佛四五返唱へ、遂に事終つて候。なんぼう哀れなる物語にて候ぞ。見申せば、船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて、御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。疾う／＼御上り候へ。ワキツレ、いかさま今日こんにちは此の處に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。ワキ、如何に是なる狂女、何とて船よりは下りぬぞ。急いで上り候へ。あらずやさしや、今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。なう急いで舟より上り候へ。シテ、なう舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ。ワキ、去年三月、今日の事にて候。シテ、さて其の兒の年は、ワキ、十二歳。シテ、主ぬしの名は、ワキ、梅若

丸。シテ、父の名字は、ワキ、吉田の何某。シテ、さて其の後は親とても尋ねず。ワキ、親類とても尋ね來ず。シテ、まして母とても尋ねぬやなう。ワキ、思ひも寄らぬ事。シテ、なう親類とても親とても、尋ねぬこそことわりなれ。其の幼き者こそ、此の物狂が尋ぬる子にては候へとよ。なう是は夢かや、あらあさましや候。ワキ、詞「言語道斷の事にて候ものかな。今までは餘處の事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや。あら痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候べし。此方へ御出で候へ。シテ、今まではさりととも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東あづまに下りたるに、今は此の世に亡き跡の、しるしばかりを見ることよ。さても無慚や死の縁とて、生所を去つて東あづまのはての、道のほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、此の下にこそあるらめや。地ち、さりとては人々、此の土をかへして今一度、此の世の姿を母に見せさせ給

へや。地「残りても甲斐あるべきは空しくて、甲斐あるべきは空しくて、あるは甲斐なき帚木はきぎの見えつ隠れつ面影の、定めなき世のならひ。人間憂ひの花ざかり、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲覆へり。げに目の前の浮世かな、げに目の前の浮世かな。ワキ詞「今は何と御歎き候ひても甲斐なき事。たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。地「既に月出で川風も、はや更け過ぐる夜念佛の時節なればと、面々に鉦鼓しょうこを鳴らしすゝむれば。シテ「母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、たゞひれふして泣き



梅 若 塚

あたり。ワキ詞「うたてやな、餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者まうじやも喜び給ふべけれど、鉦鼓を母に参らすれば。シテ「我が子のためと聞けば、げに此の身も覺鐘かくしやうを取上げて。ワキ「歎きを止め聲澄むや。シテ「月の夜念佛諸共に。ワキ「心は西へと一筋に。シテワキ二人「南無や西方さいほう極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛。地「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ「隅田河原の波風も聲立て添へて。地「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ「名にし負はば都鳥も音を添へて。子方地「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ詞「なう〜、今の念佛の内に、正しく我が子の聲の聞え候。此の塚の内にてありげに候よ。ワキ「我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候べし。母御一人御申し候へ。シテ「今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子方「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と。地「聲の

内より幻に見えければ。シテ、あれは我が子か。子方、母にてましますかと。地、互に手に手を取りかはせば、又消えつゝと成り行けば、いよゝ思はますか。み、面影も幻も見えつ隠れつするほどに、東雲の空もほのゝと明け行けば跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の草、茫々としてたゞしるしばかりの淺茅が原となるこそ哀れなりけれ、なるこそ哀れなりけれ。

二〇 戦地の一戸將軍へ

大島貞子

御禮まで一筆申上げ參らせ候。愈、御機嫌よく、數度の大激戦に何の御障もなく、御武運目出たく、殊に一戸砲臺の御名は海の内外に轟き渡り、萬世不朽の御功績は當師團の上にも光かゞやき、奉天附近の大戦には感状をも賜はり候とか、名譽限りなく、是とて御力の致しし事と、御歡び且御祝ひ申上げ候。

大島貞子
陸軍大將大島
久直の妻、大島
政三年生、安

當師團
第九師團。

久直事は容易ならぬ御高配にあづかり、御蔭様にて健全なる由有難く存じ候。なほ今後とも相變らず御心添賜はりたく候。御留守宅の御夫人及び御令嬢には至極御機嫌よく、昨年来病衣痛



一 戸 兵 衛

團の裁縫など熱心に御從事下され、殊に此の頃は嚴寒の候をも御厭ひなく、傷病者の看護などに一方ならず御盡力下され候段、團のためまことに有難く、分けて私共の仕合此の上なきことに御座候。お序の節に宜しく申上げ下されたく候。御出征以來もはや一年に相成り、長々の御心勞如何ばかりならんと御察し申上げ候。時々御

久直
秋田縣の人、
嘉永元年生、
子爵、當時は
陸軍中將であ
つた。團長で
九師團。

伺ひ申上げたきは山々に御座候へども不調法なる筆もて御多忙の御妨せんも如何と存じ實は今日まで差控へ申したる次第に御座候。何卒惡しからず御酌み取り下されたく候。御地此の頃は降雨激しき趣御國のため一際御自愛遊ばされたく祈り上げ候。先づは積る御禮のみ。あらしく、かしこ。

大島貞子

大島貞子自署

一戸將軍閣下

大島貞子

二一 新古今集の歌

ほのぐと春こそ室に來よけら

太上天皇

一戸將軍名は兵衛、青森縣の人、陸軍大將、明治神宮宮司、當時は陸軍少將であつた。

○本課は山口半峰の筆にかかると。太上天皇、後鳥羽天皇、延應元年(公元六十)崩御。

天乃香具山かすまたるびく
足渡せど山もやりのまむ水世瀬川

ゆふべを林と何おもひ帯ん

式子内親王

式子内親王、後白河天皇の皇女。

山深み妻とも知らぬ松乃たう

あえくか、る雪の玉あ

宮内卿

宮内卿、後鳥羽天皇の宮女。

うたぐさき聖迹の緑は美草よ

あともて足ゆる雪のむらぎえ

攝政太政大臣

攝政太政大臣、藤原良經、建元(公元三十八)歿、年三十八。

うちいゑりあやめぞか茂ふ杜鶴

鳴くや五月此のゆふがれ

人住まぬ不破乃閑庭の板びき

葉をよし後をよし秋の風

皇太后宮大夫俊成

駒やあそぶなほ水はせん山吹乃

花のつゆをふ井出は玉川

藤原定家朝臣

見渡さむも紅葉もなかり希里

浦乃苔屋の秋はゆふぐれ

藤原家隆朝臣

澄架乃浦や遠ざかりゆく浪留とる

さほりて出づるあり阿希の月

従四位頼政

庭乃おもむきた乾ぬに夕立の

空さるる希るく澄める月か那

俊成
藤原氏、千載集の撰者、元久元年(八六四)歿、年九十一。
藤原定家
俊成の子、新古今集・新撰集の撰者、仁治二年(一一六二)歿、年八十。
藤原家隆
新古今集の撰者、嘉祿三年(一一三三)歿、年八十。
頼政
源氏、治承四年(一一三四)歿、年五十一。

西行法師

是乃庭に清水流る柳うげ

暫くとてふそ立ちどかりつれ

能因法師

山里の春乃ゆふぐれ来て見えむ

いりあひの鐘は花ぞ散りける

寂蓮法師

和歌の浦茂松は葉越しに眺むまむ

こずふし雲をるあまの船舟

兼大僧正慈圓

有の乃月の行方をなごめてくげ

聖寺は鐘をきく庭ありける

僧正遍昭

能因法師
俗名は橘世愷、諸兄十永の孫、後鳥羽天皇の頃の人。
寂蓮法師
俗名は藤原定長、俊成の甥、建仁二年(一一六二)歿。
慈圓
慈鎮和尚、嘉祿元年(一一三〇)歿、年七十一。
僧正遍昭
俗名は良峰宗貞、寛平二年(一一五〇)歿、年七十五。

夫の病もとの楽や世の中は

たゞもなきだつとあしるらん

鴨 長明

石川やせの小川乃清亭をぞ

月もろがれを尋ねてぞをむ

鴨長明
和歌所寄人、
建保元年(1119)
三。歿、年六十

二二 錦祥女

近松門左衛門

表に轟く馬車、御歸館と呼ばはつて、唐櫃先に身き入れさせ、いうい
うたる絹笠も、さすが五常軍甘輝と名に負ふその物體。錦祥女出
迎へ、「何とてはやき御退出、御前は何と候ぞや。」「されば、韃靼大
王叡感深く、過分の御加増、十萬騎の旗頭、散騎將軍の官に任せられ、
諸侯王の冠裝束賜はり、大役仰付けらるゝ、家の面目これに過ぎず。」
とありければ、それはお手柄、めでたい。なう、家の吉事は重な

るもの、日頃戀しいゆかしいと申し暮らせし父上、日本にてまうけ
給ひし母兄弟、頼みたきことありとて、門外まで來り給へども、お留
守といひ、厳しき國の掟を憚り、男子は皆還し、母上ばかりを留め置
きしが、なほも上への聞えを恐れ、繩を掛けて、あれ、あの奥の亭にて
御馳走は申せども、胎内借らぬ母上、繩掛けし御心底、悲しさよ。」とぞ
語りける。「うゝ、繩掛けしはよい料簡。上へ聞えて言譯あり。隨
分もてなせ。いざ先づ我も對面せん、案内申せ。」といふ聲の、漏れ聞
えてや妻戸の内、なう錦祥女、甘輝殿のお歸りか。此處は、餘り高あ
がり、わらははそれへ。」と立ち出づる、形はいとゞ老木の松の、しめから
まれし藤葛、起居苦しきその風情。甘輝見る目も痛はしく、まこと
世の中の子といふもののあればこそ、山川萬里を越え給ふ、その甲
斐もなきいましめは、時世の掟是非もなし。それ女房、お手が痛む
か、氣を付けよ。優曇華のまれ人、聊か龜略を存せず。何事なりと

もこの甘輝が身に相應のことならば、必ず心置かるな。」と、世に睦じくもてなせば、老母顔色打解けて、「お、頼もしい、忝い。その詞を聞くからは、なにしに心置くべきぞ。頼み入りたき大事、密かに語り申したし。これへ〜。」と小聲になり、なう、我々このたび唐土へ渡りしこと、娘ゆかしいばかりでなし。去年の初冬、肥前國松浦が磯といふ處へ、大明の帝の御妹梅檀皇女、小船に召され吹き流され、御

は城の奥の川を流るる
自づかひぬれぬる
の東の河の川を流るる
かまの身輝まへに
流るる粉を流るる川

此城の廻りにほつたる堀の水は、自づかひぬれぬるの庭を流るる遺水の末は、黄河の川水と流入るるなり夫の甘輝が閉入て御願ひ成就せば、白粉といて流すべし川水白く

代を韃靼に奪はれし御物語聞くと等しく、父は固より明朝の陪臣。我が子の和藤内と申すもの、賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃

き、大明の味方に志すもの一人も候はず。和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝殿。力を添へて下されかし。偏に頼み参らす。これが拜む心ぞと、額を膝に押下げ、たゞ一筋の志、思ひ込うでぞ見えにける。
甘輝おほきに驚き、うゝ、さては聞き及ぶ日本の和藤内と申すは、この錦祥女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な。うゝ、武勇のほど唐土

流るる粉を流るる川
かまの身輝まへに
の東の河の川を流るる
自づかひぬれぬる
は城の奥の川を流るる

流るる粉を流るる川、かまの身輝まへに、の東の河の川を流るる、自づかひぬれぬる、は城の奥の川を流るる、此城の廻りにほつたる堀の水は、自づかひぬれぬるの庭を流るる遺水の末は、黄河の川水と流入るるなり夫の甘輝が閉入て御願ひ成就せば、白粉といて流すべし川水白く

韃大王を亡ぼし、昔の御代に翻し、姫宮を帝位に即けんと先づ日本に残し置き、親子三人この唐土へは來たれども、淺ましや、草木まで皆韃靼に隨ひ靡

までも隠れなく、頼もしき思立、尤もかうこそあるべけれ。我等も先祖は大明の臣下。帝亡び給ひてより、頼むべき主君なく、韃靼の恩賞蒙り、月日を送る折柄、望む所の御頼、早速味方と申したきが、少し存ずる旨あれば、急にあつとも申されず。とつくと思案し、御返事を。といはせも果てず、「おう、そりや御卑怯な。詞が違ふ。これほどの一大事、口より出せば世間ぞや。思案の間に漏れ聞えて不覺を取り、悔んでも返らず。お恨とは思ふまじ、成れ、成らざれ、お返事をさあ唯今。」とせめつくれば、「う、急に返答聞きたくば、易いこと。」い



(フラグヒサア)女祥錦の劇

にも五常軍甘輝、和藤内が味方なり。」といふより早く、錦祥女が胸元取つて引寄せ、劔抜いて喉笛に差當つる。老母あわてて飛びかゝり、二人が中へ割つて入り、劔持つたる手を踏み放し、娘を背中に押遣り、仰向けに重なり臥し、大聲あげて、「これ情なや何事ぞ。人に物を頼まれては、女房を刺し殺すが唐土の習か。心に染まぬ無心を聞くも、女房の縁ある故と、心腹が立つてのことか。たゞしは狂氣か。偶、始めて来て見たる、母親の目の前で殺さうとする無法人。日々が思ひ遣られた。味方をせずばせぬまでよ。今までと違うて、親のある大事の娘。これ恐いことはない、母にしつかと取りつきや」と、隔ての垣と身を捨てて、かゝひ歎けば錦祥女、夫の心は知らねども、母の情の有難さ、怪我遊ばすな」とばかりにて、共に涙に咽びけり。甘輝飛びしさつて、「お、御不審御尤も。全く某無法にあらず、狂氣

にも候はず。昨日韃靼王より某を召し、この頃日本より和藤内といふ似而非者、小僕下劣の身を以て、智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け大明の世に翻さんとこの土に渡る。彼が討手誰ならんと、數千人の諸侯の中より、この甘輝を選び出され、散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を賜はる。和藤内を我が妻の兄弟と、今聞くまでは夢にも知らず。彼奴日本に傳へ聞く、楠木とやらんが肝膽を出し、朝比奈辨慶とやらんが勇力あるとも、我また孔明が腸に分け入り、樊噲項羽が骨髓を藉つて、一戦に追つて追ひまくり、和藤内が月代首提げて來らんと、廣言吐きし某が、一太刀も合せず、矢の一本も放さず、ぬく／＼と味方せば、五常軍甘輝が日本の武勇に聞きおぢするものでなし、女に絆され縁に引かれ、腰が抜けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雑口（雑口）にかけられんは必定。然らば子孫末孫の恥辱脱れ難し。恩愛不便の妻を害し、女の縁に引かれざる、義信の二字を額

に當て、さつぱりと味方せんため。やい錦祥女。留むる母の詞には慈悲心こもり、殺す夫の劔の尖には忠孝こもる。親の慈悲と忠孝とに、命を捨てよ女房と、理非を飾らぬ勇士の詞。お、聞き分けた。身に叶うた忠孝。親に貰うたこの體、孝行のために捨つるは惜しいとは思はぬ。と、母を押退けつゝ、と寄り、胸押明くれば引寄せ、見る目危き氷の劔。なう、悲しや。とかけ隔て、押別けんにも詮方なく、退けんとするに手は叶はず。娘の袖に喰ひついて、引退くれば夫が寄る、夫の袖をくはへて引けば、娘は死なんとまた立ち寄るを、口にくはへて唐猫の躡を替ふる如くにて、母は目もくれ身も疲れ、わつとばかりにどうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女縋りつき、一生に親知らず、つひに一度の孝行なく、なんで恩を送らうぞ、死なせてたべ母上と、と、くどき歎けばわつと泣き、なう、悲しいこといふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人。残り二人の父母は、産

み落したる大恩あり。中に一人のこの母は憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず。今此處で死なせては、日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を憎んで、見殺しに殺せしと、我が身の恥ばかりかは、普く口々に、日本人は邪慳なりと、國の名を引出すは、我が日本の恥ぞかし。唐を照らす日影も、日本を照らす日影も、光に二つはなければ、日の本とは日の始、仁義五常情あり、慈悲専らの神國に、生を享けたるこの母が、娘殺すを見物し、そも生きて居られうか。願はくはこの繩が、日本の神々の注連繩と顯れ、我を今絞め殺し、屍は異國に曝すとも、魂は日本に導き給へ」と聲を揚げ、道もあり情もあり、哀れもこもるくどき泣き。

錦祥女は縋りつき、母の袂の諸涙。甘輝も道理に至極して、坐る涙にくれけるが、やゝあつて甘輝席を打つて、はつあ是非もなし力なし。母の承引なき上は、今日より和藤内とは敵對。老母をこれに

留め置き、人質と思はれんも本意ならず。輿車用意して、處を尋ね送り還し參らせよ。「いや送るまでもなく、この遣水より黄河まで、吉き便りには白粉流し、叶はぬ知らせは紅を流す約束にて、迎へにお出である筈。いで紅溶いて流さん」と、常の一間に入りにつけり。

母は思にかきくれて、思ふに違ふ世の中を、立ち歸りて夫や子に、何と語り聞かせんと、思ひやる方なみだの色、紅より先の唐錦。錦祥女はその隙に、瑠璃の鉢に紅溶き入れ、これぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる、名残は今ぞと夕波の、泉水にさらく。落ちたぎつ瀬の紅葉と、浮世の秋を堰きくだし、共に染めたる泡沫の、紅くゝる遣水の、落ちて黄河の流の末。和藤内は巖頭に、蓑打被き座を占めて、赤白二つの川水に、心をつけて水の面。「南無三寶紅が流る」と、さては望は叶はぬ。味方もせぬ甘輝奴に母は預け置かれず」と、踏み

出す足の早瀬川流を止めて行先の堀を飛び越え塀を乗り越え籬

透垣踏み破り甘輝が城の奥の

庭泉水にこそ着きにけれ。

先づ母は安穩嬉しやと飛び上

り縛の縄引きちぎり甘輝が前

に立ちはだかり五常軍甘輝と

いふ髭唐人は和主よな。天に

も地にもたつた一人の母に縄

掛けたはおのれをおのれと奉

つて味方に頼まん爲なるにも

つてうすれば方圖もない。味

方にならぬはこの大將が不足なか。第一女房の縁といひ其方から従ふ筈。さあ日本無雙の和藤内がぢきに頼む返答せい」と柄に



近松門左衛門

手を掛け突つ立つたり。「お、女房の縁といへばなほならぬ。御邊が日本無雙なれば、我は唐土稀代の甘輝。女に絆され味方する勇士にあらず。女房を去る處もなし。病死するまでべん／＼とも待たれまい。追風次第はや歸れ。たゞし置土産に首が置いて往きたいか。」いやさ日本の土産にうぬが首を。」と、兩方抜かんとする所を、錦祥女聲を掛け、「あ、／＼これなう病死を待つまでもなし。只今流せし紅の水上を見給へ。」と、衣裳の胸を押開けば、九寸五分の懐劍、乳の下より膽先まで、横に縫うて差通し、朱に染みたるその有様。母はこれとはばかりにて、かつはと伏して正體なし。和藤内も動轉し、覺悟を極めし夫さへ、坐ろに驚くばかりなり。錦祥女苦しげに、母上は日本の國の恥を思召し、殺すまいとなさるれど、我が命を惜しみて親兄弟を貢がずば、唐土の國の恥と、かうなる上は女に心ひかざる、人の誹はよもあるまじ。なう甘輝殿、親兄弟の味

この世に心残りぬか。「何しに心残りん」といへども残る夫婦の名残。親子手を取り引寄せて、國姓爺が^{いんちち}出立を見上げ見下し嬉しげに、笑顔を娑婆の形見にて、一度に息は絶えにけり。鬼を欺く國姓爺、龍虎と勇む五常軍、涙に眼は眩めども、母の遺言背くまじ、妻の心を破らじと、國姓爺は甘輝を恥ぢ、甘輝はまた國姓爺に恥ぢてしをる、顔隠す、亡骸^{なきがら}をさむ道の邊に、出陣の門出と生死二つを一道の母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鐵棒。討てば勝ち、攻むれば取る、末代不思議の智仁の勇士。玉ある淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず。かゝる勇者の出生す、國、國たり、君、君たる、日本の麒麟これなるはと、異國に武徳を輝しけり。(國姓爺合戦)

自修文

二三 教化上から見た近松

藤村作

藤村作
福岡縣の人、
明治八年生、
文學者、東京
帝國大學教授。



藤村作

教化の目から見れば、巢林子の時代淨瑠璃^{じやうるり}は悉く武家精神の通俗宣傳である。元祿時代は、軍人である職責と主従の上下關係とを基礎として成立した武士道精神が、個人の福利を營むのを本務とした町人精神と階級的に獨立して、まだ其の相互の浸潤感化が著しくなかつた時代である。武士も武士らしい武士であれば、町人も町人らしい町人であつた時代である。其の後、兩階級の間、兩精神の浸潤感化が次第に行はれて來た。武士の町人化は、武士本位の時代であつたから、武士の墮落として政治當局者や識者の憂へる所となつたが、町人の武士化は、それが階級制を壊さない限りは多く不問に附せられた。そればかりでなく、實際町人の徳操品位は此の感化に

時代淨瑠璃
昔の傳説や歴
史上の事柄な
どを基とした
淨瑠璃、國姓
爺合戦など
はそれであ
る。
元祿
東山天皇の年
號。(三三二一
三三三)

不問に附す
そのまゝに捨
ておく。

よつて高められた。此の武士道精神を町人間に宣傳して、町人の武士化を促した點に於て、近世の謂はゆる通俗文藝の功の多かつたことは言ふまでもない。

巢林子は此の方面に於ても蓋し其の尤なものであらう。彼は新淨瑠璃の陣頭に立つ人で、淨瑠璃文學は彼によつて大成されたのである。爾後の作者は一人として直接間接に其の感化を受けない者はなく、極端に言へば悉く彼の模倣者・追隨者である。斯うして彼によつて大成された新淨瑠璃時代物の内容は、彼以來殆ど固定した有様であるが、其の中心となるものは武士道精神に外ならなかつた。時代は王朝時代であらうと武家時代であらうと、又場所は我が國であらうと外國であらうと、説話の根幹となつて居る精神は常に近世武士道精神である。此の精神を表現するのに、彼は彼の謂はゆる「慰み」を目的とした民衆的藝術の衣裳を以てした。

尤なものもつともすぐれたもの。陣頭先鋒。

彼の爲した時代錯誤や階級混同は、彼の無智無學から起つたのではなくて、彼の藝術上に意識した目的から來たのである。彼は是がらゐるのを知るだけの歴史の知識は持つてゐたに相違ないが、無智な民衆の娛樂を目的としたので、自然之を犯すことを辭しなかつたのであらう。教化上から考へると、それは寧ろ彼の藝術の強みである。

藤村作自署

彼の藝術意識は馬琴などのやうな儒教風の功利的教訓主義ではなかつたので、彼の藝術は馬琴物のやうに膚淺露骨な教訓物に墮せず済んだ。そして、教訓物に墮しなかつた所が教化上一層有効であつたのに相違ない。彼の作は武士道精神を主な内容とし、通俗的で受け容れ易く、美しく麗しい色と甘い味とを附けた娛樂的な藝術の形で創作され、作毎に一代の人心を沸かしたから、其の

馬琴 瀧澤解、曲亭馬琴と號した、江戸時代後期の小説家、嘉永元年(一八二〇)歿、八十二。膚淺 あさはか。露骨 むき出し。

社會教化上の効果の尠くなかつたことは、想像するのに決して困難でない。只政治家の事業のやうに、若しくは學者の著述のやうに、其の効果を計る尺度がない爲に、とかく世人に看過され易いけれども、若し茲に此等を平等に計量することの出来る方法があるなら、彼の直接間接の社會教化上の業績はなかく、偉大であらうと思ふ。(上方文學と江戸文學)

二四 徒然草抄

吉田兼好

一 折節のうつりかはり

折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひときは心も浮きたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草もえいづる頃

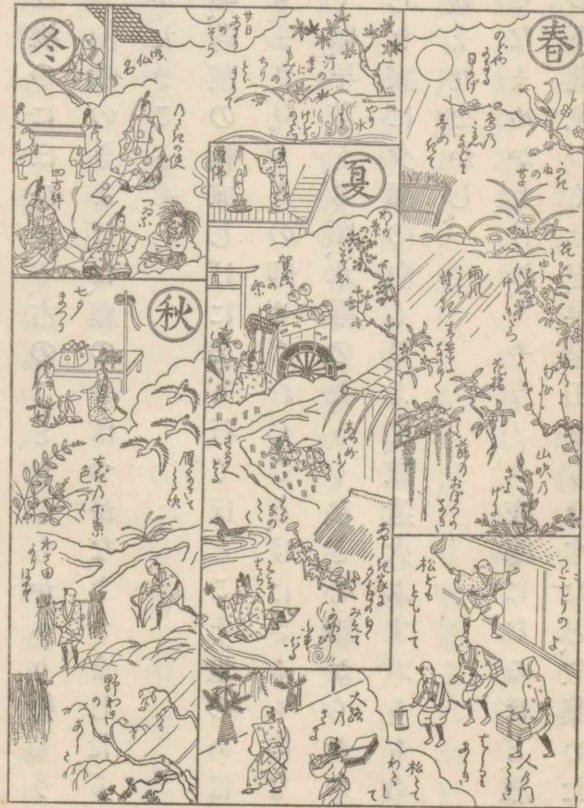
業績
てがら。

吉田兼好
本姓は下部、
鎌倉時代の文
學者、正平、五
年(一一八〇)歿、
年六十八。
物のおはれは
春はたい花の
ひとへに咲く
ばかりに、秋は
はれは秋ぞ優
れる。(讀人知
らず、拾遺集)

より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう／＼けしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のほひにぞ、古のこともたちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、凡べて思ひすてがたきこと多し。
灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに、茂り行くほどこそ、世のあはれも人の戀しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたゞくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。
七夕まつるこそなまめかしけれ。やう／＼夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稻田かりほすなど、取集めたる

花橘 さつき待つ花
橘の香をかけた
ば昔の人の袖
の香ぞする。
(讀人知らず、
古今集)
梅のほひ
色よりも香こ
そあはれとお
もほゆれたが
袖ふれし宿の
梅ぞも。(讀人
知らず、古今
集)
祭
賀茂の葵祭。
人の戀しさ
わが宿の花見
がてらに來る
人は散りなん
後ぞ戀しかり
ける。(凡河内
射、古今集)

ことは秋のみ
ぞ多かる。ま
た野分のあし
たこそをかし
けれ。
さて冬枯の景
色こそ秋には
をさく劣る
まじけれ。汀
の草に紅葉の
散りとままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそ
をかしけれ。年の暮れはてて人ごとに急ぎあへる頃ぞ、またなく
あはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けく澄



折節のつかりはり

める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名荷前の使立
つなどぞあはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに
とりかさねて催し行はるゝさまぞいみじきや。



吉田兼好

追儼より四方拜につゞくこそおもしろ
けれ。つごもりの夜いたう暗きに、松ど
もともして、夜半すぐるまで人の門たゝ
き走りありきて、何事にかあらんことご
としくのゝしりて、足を空にまどふが、曉
がたよりさすがに音なくなりぬるこそ、
年のなごりも心細けれ。亡き人のくる
夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほす
ることにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけ
しき、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞ

御佛名 十二月十九日
から三日間佛
名を唱へる公
事。
荷前の使 年末に十陵八
墓に幣帛を奉
らせられる勅
使。
追儼 十二月晦日の
夜に悪鬼を追
ふ公事。
四方拜 元旦寅の時
に天皇が四方
及び山陵を拜し
給ふ儀式。

する。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそまたあはれなれ。

二 猫また

「奥山に猫またといふものありて人を食ふなる。」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫のへあがりて猫またになりて、人捕ることはあなるものを。」といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、一人ありかん身は心すべきこととこそと思ひける頃しも、或處に



猫 また た

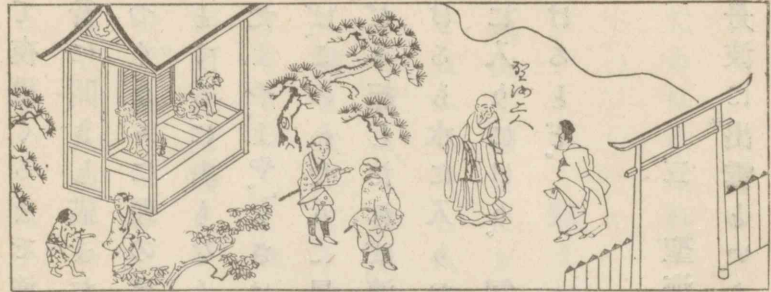
行願寺
京都一條賀茂
神社の附近に
あつた。

て夜更くるまで連歌して、たゞひとり歸りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたず足の許へふと寄り來て、やがてかきつくまゝに頸のほどを食はんとす。きもこゝろもうせて、防がんとするに力もなく、足もたゞず、小川へころび入りて、助けよや、猫またよや、よや。」とさけば、家々より松どもともして走りよりて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに。」とて、川の中よりいだけき起したれば、連歌のかけものとりて、扇・小箱など懷に持ちたりけるも水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふく家に入りにけり。飼ひける犬の暗けれど主を知りて飛びつきたりけるとぞ。

三 聖海上人

丹波に出雲といふ處あり。大社を遷してめでたく造れり。志太

出雲
南桑田郡
大社
出雲大社。



のなにかしとかや、知るところなれば、秋の頃、
 聖海上人その外も人あまた誘ひて、「いざ給へ、
 出雲をがみに。かいもちひめさせん」とて、具
 しもて行きたるに、おのゝ、拜みてゆゝしく
 信起したり。御前なる獅子・狛犬背きてうし
 ろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じ
 て、「あな、めでたや、この獅子の立ちやういとめ
 づらし、深き故あらん」と涙ぐみて、「いかに、殿ば
 ら、殊勝のことは御覽じ咎めずや、むげなり」と
 いへば、おのゝ、怪しみて、「まことに他に異な
 りけり。都のつとに語らん」などいふに、上人
 なほゆかしがりて、大人しく物識りぬべき顔
 したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立て

られやう、定めて習あることに侍らん、ちと承らばや」といはれけれ
 ば、「そのことに候。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候こ
 となり」とて、さし寄りて据ゑなほしていにければ、上人の感涙いた
 づらになりにけり。

四 人の心

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず。されど、おのづから
 正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見て
 羨むは世の常なり。至りて愚かなる人は、たまゝ賢なる人を見
 てこれを憎む。おほきなる利を得んがために、少しきの利を受け
 ず、いつはり飾りて名を立てんとすと誇る。おのれが心にたがへ
 るによりて、このあざけりをなすにて知りぬ。この人は下愚の性
 うつるべからず、いつはりて小利をも辭すべからず。

下愚の性
 唯上知與下
 愚不レ移。(論
 語)

けれ。

二五 女をよめる歌

天照大神

本居宣長

わたの原島の八十神よもの國、

ひかりあまねく天照らす神、

小野小町

小野 務

六くさのみ人の折りつる秋の野の

花にまじれる女郎花かな。

清少納言

石川 依平

かきつめし雪の日かすの争も

消えせて残る筆のあとかな。

紫式部

本居 大平

小野小町

平安朝時代初

期の歌人、六

歌仙の一人。

小野務

備中國の人、

元

年(五十四)政

年六十八。

清少納言

一条天皇の皇

后定子に仕へ

た、枕草子を

著した、雪の

日の争のこと

は枕草子に見

えてゐる。

石川依平

遠江國の人、

年安政六

年九。

紫式部

一条天皇の中

宮上東門院に

仕へた、源氏

物語を著し

むらさきの深き根ざしもかきつめし

そのまきくに見ゆる言の葉

常磐御前

本居 宣長

しら雪のかゝる憂き身のなげきにも、

こすゑ花さく春をこそ待て。

楠木正行母

大國 隆正

ちゝのみのちゝばかりかははゝそばの

散るべき時を子にをしへけり。

二六 藝術と家庭生活

池田 鑠子

現代の社會は日を逐うて複雑になるので、私達の心はこれが應接に多忙を極めて、疲勞し、困憊し、屈託する。この焦立たしい心持は、或空虚を感じ、何等かの救を求めて止まない。即ち全く活動の巷

本居大平

伊勢國の人、

國學者、本居

宣長の門人で

養嗣子、天保

四年(一四三)

歿、年七十八。

常磐御前

源義朝の妾、

その子義經等

の生命を全う

させた。

大國隆正

舊姓は野々

口、石見國津

和野藩士、國

學者、明治四

年歿、年八十。

池田鑠子

男爵池田長康

の妻、岡山縣

八年生。

を離れた別乾坤に伸びくと打寛いで、疲勞の恢復と精神の慰安とを得たいと希望するやうになる。これは決して逃避ではなくて、物質の世界を超越しようとする必然の要求である。かやうな心持の空虚を填充して、枯渴した生活に再生の生命を與へるものは藝術である。藝術が種々の象、様々の相で出現して來る時、私達の精神は快い刺戟を受けて、生命の漲つた力で充實される。随つて私達は人生を意味のあるものに考へ、現實世界の外に、永遠の理想世界に生きることが出来る。そして、理想世界に生きることが出来るといふことが、やがて現實世界の生活を一層豊富に一層偉大にする所以であると思はれて來る。私達女性、殊に家庭を持つ女性には、實生活を離れて存在することを許されない、またそれを希望する必要もない。それは女性には女性としての立場があるからである。その立場に忠實な生活は、男

子のそれに較べて少しも低劣ではない。尤も家庭に於ける女子の實生活といふ意味は、單に實際的な、物質的な、そして幼稚な、衣食住の整調にだけ満足して居る生活状態を指して言ふのではなく、もつと意味の深い、理想に燃えた、生き／＼としたそれであること

は言ふまでもない。それは物質的の豊かさではない。物質的の豊かさも全然これを無視することは出來ないけれども、しかし、それが決して唯一緊要なものではない。

精神的に豊かな靈的生活は、女性の手によつて完成されるべきである。男子は女性によつて豊潤にされた家庭を牙城として、外に出て闘ふ場合が多い。私達女性が、動もすれば現實に囚はれ易い家庭生活を、内容の豊富な、生命の漲



池田 鏗子

つた、換言すれば、藝術味の充ち満ちた状態に誘導することは、どんなに楽しい美しい仕事であるか知れない。そして、自分が藝術に憧憬を持つ心、自分の藝術に對して傾倒する心を、層一層擴大して、家庭の内に一種の藝術的雰圍氣を作り出すことに努力し、家族の凡べてが、藝術的憧憬の下に、互に理解し互に個性を尊重し合つて行つたなら、各自の藝術完成に矛盾の生ずるやうな悲哀は起らないであらう。かうして家庭は向上し、完成された生活が營まれ、そこに人間は成育し、随つてまたそこから尊敬すべき藝術が生れて來るのである。

藝術を解し趣味を尙ぶ家庭にあつては、親子・夫婦・同胞の間に、骨肉以上の一種の精神的理解が成立する。そして、涼しい夏の夕の涼臺の上の假初の會話にも、霽降る冬の夜の煖爐の前の團欒にも、言ひがたい融和があり、共鳴があり、感銘がある。思ふに、この美しい

楽しい境地を望まないものはないであらう。

藝術には藝術そのものの第一目的があつて、たゞ生活向上の方便にだけ利用されるものでないことは、今更言ふまでもないが、私達女性の立場としては、否、自分としては、藝術を尙ぶ至誠の心持さへも、日常生活のうちに育まれるものであると信ずる。そして、さういふ努力をすることは、私達の生活と毫も矛盾撞着しないと思ふ。即ち私達の生活に於ける現實と理想とのシンクロナニティーSynchronyが得られると思ふ。家庭がこんな状態に統一された時、始めて精神の疲弊を救ふことが出來、そして、生命の溢れた別乾坤に新たな活力の泉を汲むことが出来るのである。

二七 御歌を拜誦して昭憲皇太后を偲び奉る

三室戸敬光

三室戸敬光
明治六年生、
子爵、宮中顧問官。

歲月が過ぎれば過ぎるほど、益、高くさやかに仰がれますのは、昭憲皇太后の大きいなる御坤徳でございます。昔から和歌は純情の發露、至誠の表象とされてゐまして、優れた歌といふのは、決して技巧の妙に富んだものを申すのではありません。歌道の御嗜の深くおはしました皇太后の御歌を拜誦しますと、殊にその感じが痛切であります。

今茲に御歌の御風懷に觸れ奉つて、皇太后が、明治天皇の御配偶として、はたまた御女性として、いかに御婦徳に秀でていらせられたかを偲び奉ることにいたします。

大正十三年宮内省によつて發表されました皇太后の御歌は千首に近いと申すことであります。そして、その内の百首近く、即ち一割ほどの御歌は、悉く明治天皇の御上を思召しての御貞節の發露の結晶であります。「夫婦」とか「貞操」とか申すやうの御題の御歌

昭憲皇太后、御名は美子、大正三年崩五、御年六十

宮内省云々「昭憲皇太后御集」をいふのである。

でありますれば、それは尤ものことに存じられますが、たゞ折々の花鳥風月をお詠じ遊ばされました御歌の中に、おのづから天皇を御思念遊ばされる御真心が窺はれるのであります。これは實に心して拜誦しなければならぬことであります。明治二十五年の春の御歌の中に、

みそなはす暇だになくて御園生の

梅は惜しくも散り果てにけり。

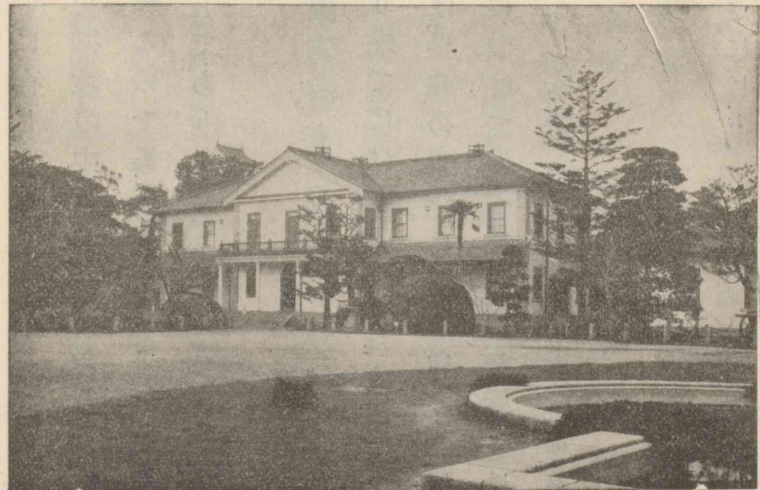
と申すのがあります。この御歌は、早春の寒空に清く白く咲いた御苑の梅花を御賞翫遊ばしますにつけて、先づお心にお浮びになるのは、常に御繁劇な御政務にいそしみ給ふ天皇の御上であることを詠ませられたのであります。

假宮の春いかならん御園生の

梅は残らず花咲きにけり。

この御歌は、明治二十八年、即ち日清戦争の當時、明治天皇には御親ら大御車を遙々廣島に進めさせられ、その大本營で御不自由がちにお過し遊ばされていらせられた折、宮城にお留守居遊ばされていらせられた皇太后が、軍機を統帥し給ふ天皇を遠く偲ばせられての御述懐であります。

夏の御歌の中に、
すだく蚊の聲いぶせしとお
ぼすらん、のきばをぐらき假
のみやゐに。



廣島大本營

と申すのがあります。この御歌は、明治六年に皇城が炎上しましたので、赤坂離宮を假の宮居と定められ、同じく二十二年の一月十日まで、そこで天皇が御不自由を忍んで過させられたのをお痛み奉つて詠ませられたのであります。これは明治十三年の夏の御歌であります。

秋の御歌の中に、
秋の日の照るにつけても思ふかな、
おほみくるまの内はいかにと。
と申すのがあります。この御歌は、明治十一年の秋の頃、照りつける残暑の日の下に、東山・北陸兩道御巡行の御輦の内に在らせられる天皇の御辛勞を遙かに偲ばせられてのお優しいお心の露れであります。
冬の御歌の中に、「寒夜埋火」といふ御題で、

假宮の窓の夜あらし寒からん、

親しみたまへ埋火のもと。

と申すのがあります。この御歌もまた廣島の大本營に御駐輦遊ばされていらせられる天皇の御身を、風の寒い夜にお氣遣ひ遊ばされて詠ませられたのであります。

かやうに、雨につけ風につけ、暑さにつけ寒さにつけ、絶えずお心を天皇の御上にお寄せ遊ばしていらせられたのであります。その御貞淑のほど誠に畏い極みであります。

明治十二年に詠ませられました「夫婦有別」といふ御題の、

睦じき中洲にあそぶみさごすら、

おのづからなる道はありけり。

と申す御歌を拜誦しましたが、また同年の「男女同權」といふことをいふ御題の、

松が枝に立ち並びても咲く花の

よわき心は見ゆべきものを。

と申す御歌を拜誦しましたが、大御心のほどが拜察されます。

謙遜が人の寶であると思召されましたは、

高山の影をうつして行く水の

ひきゝに就くを心ともがな。

と御自らを省みていらせられます。

また殊の外に仁慈のお心が深くあらせられ、明治十四年の「爐邊述

懐」といふ御題の御歌には、

寒き夜に重ねん袖もなき人の

身をこそ思へ埋火のもと。

と宣うていらせられます。

病む人を來て見る度に思ふかな、

みな癒え果てて家に歸れと。

これは明治二十二年のお作であります。慈惠醫院に御親ら患者を見舞はせられ、病床にある幸薄い人々に、御目錄・反物・お菓子などそれ〴〵に賜はつて、患者をおいたはり遊ばされました際の御歌であります。「來て見る度に思ふかな。」この「思ふかな」の御一語



昭 憲 皇 太 后

に、無量の御仁慈が溢れてゐます。而もこの慈惠醫院は、病に苦しむ貧しいものを御救恤遊ばされる大御心に副ひ奉るために創立されるやうになつたものであると承つてゐます。現今

でこそ救濟事業とか慈善事業とか申すことに一般の人々が注意するやうになりましたが、皇太后には今から凡そ四十年ほど前に、早くもかやうな人道の問題にお心をお注ぎになつていらせられたのであります。誠に畏い極みではありませんか。また日露戦争終了後、明治四十年に「癩兵院」といふ御題の御歌に、いかにして日を送らん國のため身を損なひしますらをの友と申すのがあります。明治三十七八年、日露戦争に際し、君國のため父母の地を去つて、遠く滿洲の戦場に銃劍を執り、名譽の負傷をして不具となつた人々の身の上をお思ひやり遊ばしては、いかにもそのお優しいお心をお痛め遊ばされたことでありませう。教育、殊に御自身が御女性でいらせられますだけに、女子教育に就いては日夜お心をお注ぎになりました。今の女子學習院の前身

である華族女學校も、その畏い思召によつて創立されたのであります。その時同校に賜はりましたのが、金剛石及び「水は器の有名な御歌であります。また明治九年には、今の東京女子高等師範學校の前身である東京女子師範學校へ、

みがかずば玉も鏡も何かせん、

學びの道もかくこそありけれ。

と申す御歌を賜はりました。

以上の御歌によつて、皇太后がいかにかに氣高いお方で、そして、いかに御立派な御行を遊ばされたかが窺はれます。これは素より御性質にもよらせられる御事でありますが、一つには御自身の御地位を念々お忘れなく、朝に夕に御身を省みて、ひたすら御修養にお心を用ひさせられた結果であると存じます。

朝毎に向ふ鏡のくもりなく

あらまほしきは心なりけり。

日にみたび身をかへり見し古の

人の心にならひてしがな。

此等は修養に御精進遊ばされた尊いお聲であります。日に／＼御修養にお努め遊ばされるためには、讀書にも非常にお心をお注ぎになりました。明治十二年の御歌には、

夜ひかる玉も何せん身を照らす

ふみこそ人のたからなりけれ。

と仰せられ、また明治三十九年の御歌には、

讀むふみは机の上に置きながら、

さぶらふ人と語りあひつゝ、

と仰せられました。たゞ書籍をお書棚の中に美しく並べて置かせられるのではなく、日々夜々御讀書にお勵み遊ばされた御様子

が、あり／＼と拜察されるではありませんか。

筆とらぬ日はまれなるを書く文字の

など人なみにおくれたるらん。

と御謙遜遊ばされながら、書道にも殊の外御熱心であらせられたことが拜察されます。また書はその人の風格・品位を現すものであると聞召しては、

執る筆のあと恥かしと思ふかな、

心のうつるものと聞きては、

とお詠みになつて、御立派な御水莖の跡にあらせられながら、御身を省みさせられる御徳風のほど、誠に畏い極みであります。

人並にふむとはすれど敷島の

道のひろさに惑ひぬるかな。

この御歌は明治二十二年に物せられました和歌に就いての御述

懐であります。が、まだお若くいらせられたその頃既に歌道にもお心を傾けていらせられたのであります。由來和歌は歴代の皇室に重んじられたものではあります。一つには明治天皇が御作歌に殊の外御趣味が深くあらせられましたので、いはゆる夫唱婦隨なる日本婦道之美風にお心から従はせられたのであらうと拜察されます。

明治天皇が内外一般から世界の大帝とまで御尊崇を受けさせられますのは、素より天皇の御聖明によらせられることではあります。が、また一つには皇太后の大いなる御内助にもよらせられる御事と拜察されるのであります。

二八 多摩御陵参拜の記

九條 武子

昭和二年如月の春まだ浅い或日曜日に、私達は多摩御陵参拜のた

九條武子
男爵九條良致
の妻、京都市
の人、明治二
十年生、歌人。
多摩御陵
大正天皇の御
陵、東京府南
多摩郡横山村
大字下長房字
龍が谷戸にあ
る。

めに、道を甲州街道*に取つて自動車を駛らせた。空は曇つて薄日もさゝず、雲の行き來は何か知らず心淋しかった。自動車は、都の西、平坦な道を靜かに駛つて行つた。過ぎ行く沿道の村々は、春の訪れも後れて、まだ冬の籠かごの淋しい色に包まれてゐた。



九條武子

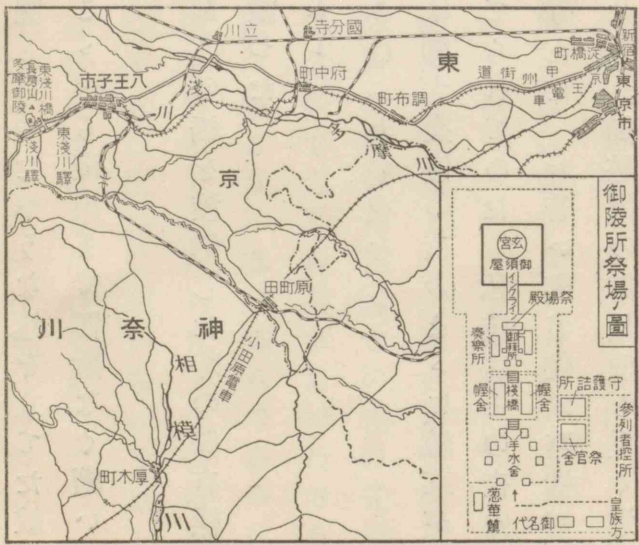
梅も咲かず疎らたかむら篋かまき黒土に、やゝまだ春の遅き村かな。庭つ鳥胸毛ふくらめ掘る土に、まだ草の芽も籠りてあるらし。道すがら、青い屋根、桃色の窓、ラヂオのアンテナなども見えたが、やがてペンキを塗つた所謂文化住宅が次第に少なくなつて、調布あづまふの里を過ぎたあたり、見はるかす遠い丘の上に、鎮守の森、桑畑などが、昔の武藏野らしい畫幅を展げてゐた。

甲州街道
東京市四谷區
新宿から府中
を経て甲府市
に至る街道。

調布
東京府北多摩
郡。

多摩川はまだ冬枯の姿で、枯れた薄が堤に残つてゐた。浅い流の水面には灰色の雲が映り、岸の松林は鼠色と茶褐色との野を一線に劃してゐた。

八王子の郊外に近づくと一面の桑畑であつた。今は知らず、昔は機織り暮らしたであらう家々の女達の仕事か、ゆかしくもまた懐かしいものとして偲おもばれた。村々の淋しさを見て來た眼に、急に八王子市の華やかな店頭みせの光景が映つた。新宿を起點とする京王電車はこの市まで延びてゐる。乗客の多くは御陵参拜の人



達であつたらう。何團體、何青年團といったやうな旗を立てた紋服や制服を着た人など、参拜者はこゝから浅川まで間断なく續いてゐた。

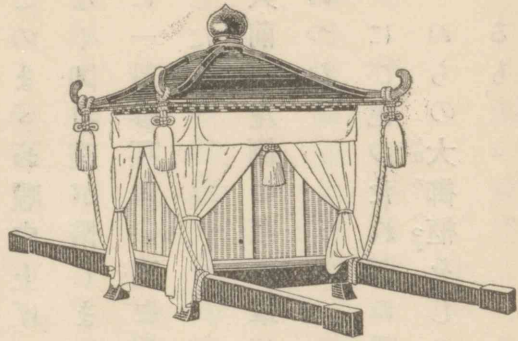
八瀬童子が仕へまつた葱華輦がこの橋を渡御した時の御有様を偲びながら、やがて東浅川橋を渡つた。

人のみか河原の小石ひとつ

泣きぬれにけんみはふりの夜を。

御門を入つて参道十數町の間には、御大喪儀の夜のまゝに、鯨幕が引渡され、幾百基の高張提灯が立てられてゐた。私達はその夜の悲みを新にして、胸の塞がるのを覺えた。お若い御名代の宮様が、あの寒夜に、父帝の御喪主とならせられ、御愁傷の御足取も重く進ませられたであらう、淨い玉砂利の道は、一日數萬を數へる参拜の國民によつて踏み固められてゐた。

御名代の宮
秩父宮雅仁親
王



葱 華 輦

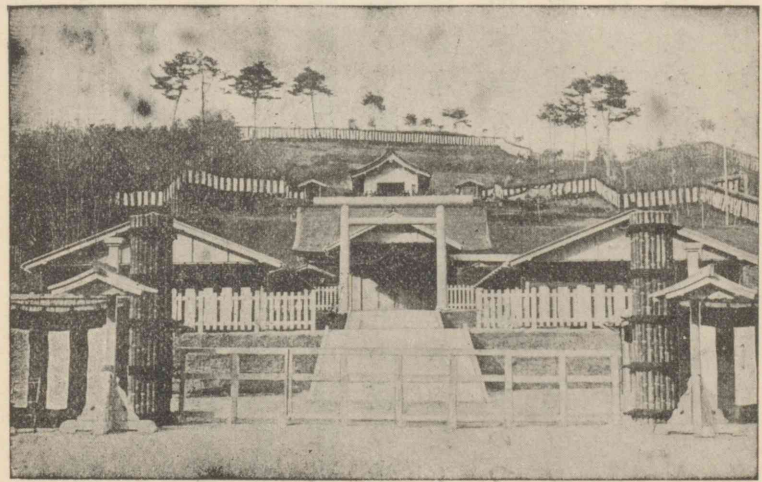
第二の御門の左側にある参集所に姓名を通じ、そこで手を清め口を漱ぎ、守部の人に導かれて御柵の内に参進した。御幕の内には近衛歩兵が大御靈をお守り参らせてゐた。霜冴える曉かけて焚かれた庭燎、紅に燃えた大篝火、奉悼奉弔の音を籠めて響いた梵鐘、その夜の光景はいかに哀痛で而も森嚴であつたであらう。偲び奉るさへ忝い極みであつた。御鳥居近く數歩の前に参進し、至誠を籠めて奉拜した。先帝の御靈の長へに神鎮まります御前、畏れ多さに自然に頭が垂れて、見上げることも出来ず、たゞ心からの合掌を捧げるだけであつた。眞近くも我がこの身もおほけなくをろがむ今日の畏さ

はしも。

大前の清らかな砂利を踏む足音も神域に憚のある心地がして、との参集所まで退いた。しかし、このまゝお暇申上げるのは何となく御名残が惜しまれるので、更に一般参拜者の列に入つて奉拜した。

大前の左側に葱華輦が安置してあつた。

にび色のたれぎぬ重し御簾ぬちの大御柩をしぬびまつるも。



祭 場 殿

八瀬の童幸こそありけりやはての

御伴つかへぬ民おほきうち。

先に拜した祭場殿をなほしみとと拜し奉ると、そこには日像燾旛月像燾旛を兩側に、鉦鼓御弓大真神がお供へしてあつた。祭官はこゝに日供をお供へ申上げるのであらう。

日の御旗月の御旗の並びたり、祭場殿のその夜しもおもふ。

靈柩を引上げまゐらせたインクラインは綺麗な芝で蔽はれてゐた。その高い丘の上に、玄宮がなかば半月形に仰がれた。御須屋の扉は固く鎖されて、大御靈は永劫に長房山に御安らげく鎮まりますのであつた。

短い私達の生涯に於て、大君の永劫の行幸を二度までも送り奉つたことは、何に譬へやうもない悲しい限りである。泣いても泣い

インクライン
傾斜面輸送装
置。

ても泣き切れぬ奉悼の悲愁の裡に、しみぐと偲び奉るのは、量り
知られぬ御恩徳である。私達はその御恩徳に對して報謝の誠を
捧げ奉るのには、新帝が勅語で示し給うた御趣旨を奉體し、良い民
として仕へ奉る外に道はない。かう思ひながら、私達は暫くの間
御陵の御前に額づいてゐた。
櫟の雑木林は黙して立ち、夕近い淺川の里は靜かに喪に服してゐ
るやうであつた。冬枯の武藏野も、やがて訪れる春の光に、小鳥等
が御陵のほとりに可憐な挽歌を捧げ奉ることであらう。

勅語 昭和元年十二月二十
八日、朝見の儀に於て賜はつ
た。勅語を指す。

新女子國語讀本

第二修正版 卷ハ 終

□本讀語國子女制新□



大正十一年十月廿七日 印刷
大正十二年一月四日 訂正再版印刷
大正十三年九月十一日 修正三版印刷
昭和二年九月二十三日 修正四版印刷
昭和三年一月十一日 訂正五版印刷

著者

東京開成館編輯所

代表者 松本繁吉

發行者

株式會社 東京開成館

代表者 松本繁吉

印刷者

佐々木俊一

發行所 東京市小石川區小日向水道町八十四番地

株式會社 東京開成館
〔振替貯金口座〕東京第五三三三番

大正十一年十月三十日 發行
大正十二年一月七日 訂正再版發行
大正十三年九月十五日 修正三版發行
昭和二年九月二十六日 修正四版發行
昭和三年一月十四日 訂正五版發行

六…一卷 定價 錢七拾六金各
十…七卷 錢參拾六金各

刷印社會式株刷印士富

